

共産党ボス政治から脱共産主義カシキスモへ ー ロシアの市・郡エリート 1985-1996 ー

松里 公孝

I. 序論

本稿は、ペレストロイカの開始から1996年の市長・郡長選挙に至るまでのロシアのサブリージョン（市・郡）政治を分析する。分析対象としてピックアップされたのは、サマーラ州からキーネリ、クラスノアルメイスキー、ペストラフカの3郡^{*1}と、タンボーフ州からコトフスク、ウヴァーロヴォ、ラスカーゾヴォ3市^{*2}である。

ロシアの地方政治研究が西側のポスト・ソヴェト学の花形の地位に躍り出て久しいにもかかわらず、リージョン（連邦構成主体）のみが唯一の地方権力であるかのような扱いを受け、市・郡の政治が政治学者から無視され続けているのは奇妙な事態である。たしかに、単一主権主義をとり、言語上も都道府県・市町村の全てを「地方」と呼ぶ^{*3}日本人にとっては、地方＝リージョンという誤解も許容範囲内にあるのかもしれない。しかし少なくとも英語国民にとっては、regional と local とは全く別の単語であるはずである。このようなリージョン中心主義（リージョナリズム？）はどこから生まれるのか。研究資金の不足から市・郡の現地調査にまでは手が回らないためだろうか。悪名高きロシアのローカルバスに2、3時間揺られて「郡都」まで辿り着くのは、西側の研究者にとってあまりにも過酷な作業だからだろうか。それとも、最悪の事態を想定すれば、サブリージョン政治研究の意義が政治学者に未だ理解されていないからだろうか。

筆者は、別稿において、こんにちのロシアの国家建設を「モスクワ・対・連邦構成主体」という2項対立の図式で捉えるのは誤りであり、それは、「連邦権力、リージョン（連邦構成主体）、市・郡権力」の三つ巴の関係で理解されなければならないと主張した^{*4}。本稿では、サブリージョン政治を、エリート再編と地方選挙に焦点を絞りながら、いわば内側から詳述することを目的とする。これは、サブリージョン政治をリージョン政治や連邦政治から切り離して個別事例的に分析するというのではない。

*1 本稿では、ロシア語の「ライオン」を郡と訳す。

*2 これらは全て「州に直属する市」、つまり行政区画上、郡と同格にある中規模都市である。対照的に、「郡に従属する市」（小規模の市）は、人口的には日本の町にあたり、地方政治というよりもコミュニティ政治として分析した方が適切なようである。

*3 本稿は、混乱を避けるために日本語の慣用を避け、「地方」という言葉を市・郡レベルに限定して用いている。つまり、リージョン-地方-コミュニティの3層を峻別する。

*4 K. Matsuzato, "Subregional'naya politika v Rossii: metodika analiza," K. Matsuzato (ed.), *Tret'e zveno gosudarstvennogo stroitel'stva Rossii: podgotovka i realizatsiya Federal'nogo Zakona ob obshchikh printsipakh organizatsii mestnogo samoupravleniya v Rossiiskoi Federatsii*, Occasional Papers on Changes in the Slavic-Eurasian World, No.73 (Sapporo, 1998), pp. 12-35.

反対に、筆者は、ロシアの郡市レベルの政治こそが、旧社会主義国の中でも例外的な、独特なエリツィン政治体制を成立させる原動力だったと考えている。

「過度期」論の立場からは、ノメンクラトゥーラ出身で、市場経済に反対、伝統的な家父長的指導スタイルをとる年輩の地方ボスたちが、ノメンクラトゥーラの「前科」がなく、市場経済化に熱心で、西欧的な政治文化を身につけた若い地方政治家たちに取って代わられれば、ロシアの民主化は進む、と考えられるかもしれない*5。しかし、少なくとも郡市レベルでは、あれこれの指導者の旧体制へのコミットメントの度合いと現在の政治的な立場とに、上述とは反対の相関関係が見られること、つまり、かつての地方党第一書記、地方ソヴェト執行委員会（イスパルコム）議長たちこそがこんにちの「改革路線」の地方基盤となっていることはよく知られたことである。筆者の見解では、「過度期」論は、ロシア政治についての実証データが不足していた時代（1990年代前半）の産物であり、理論的には、民主体制、準民主体制が多様でありうるということを見無視するところから生まれる議論である。こうした非歴史的・目的論的モデルに飽きたらず、多くの政治学者たちは、歴史的で比較政治学的なモデルに代替方法を求めるようになっていく。彼らは（ポスト）ソヴェト学者の哀れな蝸壺に見切りをつけて、北米、南欧、東南アジアなどの政治・歴史研究の成果に注目するようになっていく*6。

本稿は、市・郡レベルの政治こそが、ロシアの政治体制を、共産党的ボス政治から脱共産主義下のカシキスモ*7へと移行させた原動力であったという前提に立つ。本稿は、カシキスモという用語を、「行政的な、非公式の資源を駆使した、地方レベルにおける一党優位制」という意味で用いる。発生論的には、脱共産主義カシキスモは、

*5 正確に言えば、このような考え方は「過度期」論が心から信じられていた1993年頃まで流行ったものであり、1994年以降は、逆に、現存指導者が旧体制からの生き残りであることは当然であるかのような議論が隆盛した。しかし、これらはいずれも、ロシアで支配的な言説が西側の政治学者に有形無形の影響を及ぼしていることの現れという印象を否めない。筆者の考え方は、みぎの二つのいずれでもない。筆者は、旧体制下の幹部抜擢のシステムが業績主義の観点から優れたものであったことを認めるが、同時に、たとえば、1991年末-92年初めに、サマールのチトフやニジェゴロドのネムツォフのような、当時「改革的」との名声を博していた知事がかつての市・郡共産党第一書記を市・郡行政府長官（市長・郡長）に積極的に登用した事実を、たんなる業績主義の反映とは考えない。それは、チトフやネムツォフが、1990-91年民主主義革命が前面に押し出した人物よりも、旧共産党第一書記たちの方が政治的に信頼でき、また自分に政治的な利益をもたらすと判断した結果である。

*6 一例として次を参照: Michael Brie, "The Political Regime of Moscow - Creation of a New Urban Machine?" *Wissenschaftszentrum Berlin für Sozialforschung*, P97-002.

*7 カシキスモの語源となっている「カシケ（酋長）」は、中南米征服の際にスペイン人たちが現地語・アラワカン語から採取した言葉である。カシケの位階制からなる先住民の政治体制は、植民地経営のための間接支配にも利用された。やがて、カシキスモという概念は、南欧諸国の政治システムを表現する概念へと転用された。したがって、カシキスモという概念は、文化人類学の概念が政治学に転用されたという点でも、また植民地の先住民の政治システムを表現する概念が本国の政治システムを表現する概念へと転用されたという点でも特異な運命を辿ったと言える。注目すべきなのは、この政治

ソ連共産党下のボス政治が競争選挙時代に適応した結果である。この視点からは、ここで分析対象を供給した2州は好対照をなす。コンスタンチン・チトフ知事下のサマーラ州は、共産主義体制崩壊後のロシア政治の一般的な趨勢、すなわちカシキスモへの移行を典型的に示す例であるのに対して、タンボーフ州は、地方政治が非常に党派的な様相を呈しており、その党派性ゆえにカシキスモが発達できない例外事例である。本稿は、詳細な事例研究とリージョン内比較の後、結論部で、なぜこのような分岐が生じたのかという問題を改めて論じるだろう。

本稿の準備作業として、ロシアの地方エリートの社会学的な構造が考察されなければならない。ロシアの市・郡レベルのエリートは、二つの層から形成されている。第一層が、トップリーダー（旧体制下の市・郡党委員会第一書記、新体制下の市・郡行政府長官）およびその次期候補（リゼルヴ＝幹部予備）である。これがロシアの政治隠語でいうところの「強い指導者」であるが、これに属するのは各市・郡に5名程度ではなかろうか。リゼルヴとは、具体的には、旧体制下では市・郡イスパルコム議長、党第二書記、域内の有力な企業長および集団・国营農場長などであり、新体制下では、市・郡行政府長官の有力代理、域内の有力な企業経営者および集団農場長、そして（何らかの理由で野に下った）かつての大物指導者である。敗者復活のチャンスがふんだんにあるところは、旧体制との大きな違いである。反面、市場経済化の建前とは裏腹に、有力企業長、集団農場長などの経営指導者が政治指導者の潜在的な候補であり続けていること、また、「リゼルヴ」という言葉が新体制下でも政治隠語としては生き続

システムが、伝統的な部族社会が（インカ、マヤなどの）高度な官僚国家に発展する過程、またこの高度な官僚国家が解体する過程で発生したことである // Robert Kern (ed.), *The Caciques - Oligarchical Politics and the System of Caciquismo in the Luso-Hispanic World* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1973), pp.7-8. 近代化論の概念としては、カシキスモは、ビスマルク体制に代表される官僚国家（Beamten-Staat）と並び、またそれに対比されるセミ・ポリアーキー（準民主制）の一形態とされる // 篠原一『ヨーロッパの政治：歴史政治学試論』（東京大学出版会、1986年）、17-18頁。ただし、ここでは篠原は、ボナパルティズムをビスマルク体制の上位概念としている。よく言われることだが、官僚国家においては鉄道は（技術合理性の観点から）まっすぐ引かれ、カシキスモの国々では（地方ボスの要求に応じて引かれるため）グニャグニャ曲がるとされる。日本の鉄道政策史は、日本の近代化が官僚国家とカシキスモの折衷形態であったことを示している。文化人類学、政治学の用法に共通しており、また本稿にとっても非常に重要なのは、カシキスモがウェーバー的な上意下達の位階制ではなく、あくまで上位者と下位者の間の利害の一致に基づく連合的な位階制である点である。脱共産主義期の政治にカシキスモ概念を適用する前提は、カシキスモの基盤となるボス政治、恩顧政治は、共産党体制下で既に成立していた、脱共産主義過程は、これに競争選挙という決定的な一要因を付け加えたにすぎないということである。その意味では、カシキスモは、マシーン政治と近い概念である // Kimitaka Matsuzato, "The Meso-Elite and Meso-Governments in Post-Communist Countries - A Comparative Analysis," 皆川修吾編『移行期のロシア政治：政治改革の理念とその制度化過程』（渓水社、1999年）、222-242頁。しかし、マシーン政治という概念は、北米におけるその発生からして、大都市社会の付随物という含意があるため、農村偏重のエリート補充、農村重視の得票政策に特徴づけられるソヴェトおよびポスト・ソヴェト体制の分析には不適切であると考えられる。この点で、カシキスモ概念の方が適切である。

けていることは興味深い*8。旧体制下でのエリート第一層内部での標準的キャリア・パターンは、「党第二書記→イスパルコム議長→党第一書記」というものであった。

このエリートの第一層を第二層が取り囲む。第二層を構成するのは、行政府の部局長クラス（旧体制下では市・郡党第三書記と党委員会の主な部局長、イスパルコム議長代理など）、企業経営層、市・郡病院長、中等学校長、警察署長、市・郡検事、市・郡新聞編集者など、つまりいわば地方名士である。これがおそらく一市・郡あたり20名前後であろう。第二層の重要性は、ここにおける評判が、あれこれの指導者を第一層に押し上げる（あるいは押し上げない）主な原因となる点にある。ここであげた「5名」「20名」という概数は、当該地の人口規模や産業・文化の水準により変動することが予想されようが、筆者の観察では、むしろそうした客観的要因に関わりなく「約5名-約20名」の二層構造が成立しているところが特徴的である（逆に言えば、当該地の人口規模や産業・文化水準は、この「5名、20名」の質に影響する）。おそらくロシアの市・郡が独立した政治単位を形成しているという事実そのものが、このような構造を要求するのであろう。

このように、地方エリートの社会学的層構造が新旧両体制を通じて不変であるということが、本稿にデータを提供した調査方法、すなわち「地方エリートの名声調査」を可能また必要ならしめたのである*9。この調査方法について説明すれば、各市・郡において、上に例示された地方名士の中から15名が抽出される。彼らに、(1) ペレストロイカ開始以前（1985年以前）、(2) ペレストロイカ期（1985-91年）、(3) ソ連共産党の崩壊からソヴェトの廃絶まで（1991-93年）、(4) それ以後現在に至るまで、という四つの時期についてそれぞれ、当該市・郡において最も権威があったと考えられる5名の指導者を、権威があったと思う順に挙げてもらう。次に、それぞれの指導者について、権威があった理由を、次の13項目から2項目以内で選ばせる。1. 党籍、党への献身、2. 教養・文化水準の高さ、3. プロフェッショナルリズム、自分の仕事をよく知っている、4. 地域の利益を主張して一步も引かない、5. 人に対する配慮と関心、6. 民族的帰属、7. 上位の指導者との人脈、8. 地位の高い親戚がいる、9. 強力なイニシアチブ、粘り強さ、精力的であること、10. 人を説得し、ついて来させる能力、11. 必要な財源を見つける能力、12. 自分が現に就いている地位ゆえに、13. その他。なお、12番目の「自分が現に就いている地位ゆえに」には、かなり否定的なニュアンスがある。

5名の「権威があった指導者」の権威の度合いについては、回答者が当該人物を

*8 たとえばタタルスタンなどに見るように、幹部予備制度が近年公式に復活した例もある。

*9 この方法は、筆者が川崎嘉元の研究から学んだものである。川崎嘉元「脱社会主義下における地域リーダーの再編—スロバキア共和国の事例研究」石川晃弘、塩川伸明、松里公孝編『講座スラブの世界4：スラブの社会』、弘文堂、1994年、pp.333-351。

トップにあげた場合は5点、第2位にあげた場合は4点...第5位にあげた場合は1点という形で当該人物に点を与えて加算する。「権威の理由」については、あげられた理由にそれぞれ1点を与えて単純に加算する。この調査を通じて、地方名士が、自分の市・郡の個々の「強い指導者」をいかに評価しているかを知ることができる。この調査は、サマール州の3郡については1996年春、タンボーフ州の3市については同年秋に行われた。これら6事例のうち、コトフスク市については、連邦保安庁(FSB)の地方支部の介入により、調査は完遂されなかった。本稿中、コトフスクの名声調査結果の表が欠けているのはそのためである。

1996年の市長・郡長選挙は、かつての地方党書記やイスパルコム議長の勝率が依然として高いことを示した。これは、彼らが、票の動員、マスコミ利用、地元企業からの政治資金調達、個々の有権者への「行政的梃子」の行使などの、勝つための手練手管を旧体制下で修得していたことを想起すれば、いわば当然である。多くの地方で、かつての党-イスパルコム・ボスたちこそが、競争選挙下でも本命候補であり続けているのである。したがって本稿は、1990年以前の地方エリートたちがいかに生き延びたかに大きな関心を払う。この視点からは、個々の地方政治史の個別性にもかかわらず、三つの決定的契機があった。それは、1990-91年における二つの「兼任方針」と、1991年末における地方行政府長官任命制の導入である。第一の「兼任」は、市・郡党第一書記が市・郡ソヴェト議長を兼任する(もちろん、ソヴェト内で行われる議長選挙に勝てればの話だが)ことを意味しており、これは、1990年春の民主的中央ソヴェト選挙の後にゴルバチョフが追求したものである。第二の「兼任」方針は、1990年の民主選挙の結果として到来した素人民主義・無政府状態への対処として1991年の初めから春にかけて全ソ的に提案されたもので、立法・執行の統合、つまり市・郡ソヴェト議長と市・郡イスパルコム議長とを同一人物に兼ねさせることを目指した。第二の兼任方針は、ゴルバチョフの兼任方針に比べて有名ではないが、実はこれも旧体制地方エリートの生存にとって大きな意義を持ったのである^{*10}。もし、ある市・郡党第一書記がこの二つの兼任政策を巧妙に利用したとすれば、彼は1990年の春にソヴェト議長職を兼任し、さらに1991年には当該イスパルコム議長をも兼任し、そして順当には1991年末もしくは1992年初めに市・郡行政府長官(市長・郡長)として、知事によって任命されたであろう(以下、地方行政府長官任命制導入時

*10 リージョンレベルでのこの二つの兼任方針の意義については、次の拙稿参照: "The Split and Reconfiguration of Ex-Communist Party Factions in the Russian Oblasts: Chelyabinsk, Samara, Ulyanovsk, Tambov, and Tver (1991-1995)," *Demokratizatsiya - The Journal of Post-Soviet Democratization*, Vol.5 (1997), No.1, pp.53-88. 特に 59-60、67 頁。みぎのロシア語版としては、"Raskol KPSS i peregruppirovka eks-nomenklaturnoi elity v Chelyabinskoi, Samarskoi, Ul'yanovskoi, Tambovskoi, Tverskoi oblastiakh Rossii," *Federalizm i detsentralizatsiya* (Ekaterinburg, 1998), pp.127-187. 特に 138-140、151-152 頁。

に任命された長官を、その出自に関わらず「最初に任命された市長・郡長」と呼ぶことにする)。この幹部異動のパターン、つまり旧地方党第一書記が地方行政府長官として生き延びた諸事例を **A 1 型** と呼ぶことにしよう。「最初に任命された市長・郡長」のうち、サマーラ州においては34%が、タンボーフ州においては23%がこの型に該当していた*11。地方ノメンクラトゥーラの生き残りのもうひとつの型は、地方党第一書記ではなかった地方イスパルコム議長が市長・郡長になった例である。これを **A 2 型** と呼ぶことにしよう。「最初に任命された市長・郡長」のうち、サマーラ州では40%が、タンボーフ州においては27%がこの型に該当した。A型を合計すると、サマーラ州知事チトフは、その市場信奉者という名声とは一見矛盾するが、何と4分の3近い市・郡において、旧体制下の地方ボスに依拠して新権力を組織したのである。対照的に、タンボーフ州知事バベンコ（穏健民主主義者）は、約半数の市・郡においてしか、旧体制下の地方ボスの市長・郡長への横滑りを許さなかった。

スヴェルドロフスク州やウクライナのガリツィヤ3州のような急進的な州においては、1990年春の民主選挙で前面に押し出された地方ニューリーダーたちが1991-92年まで指導的地位にあり続けてそのまま市長・郡長に任命された例（ウクライナの場合、郡長のみ任命制）も稀ではない（**B 型**）。しかし、サマーラ州とタンボーフ州については、「最初に任命された市長・郡長」のそれぞれわずか6%、5%がこれに該当するにすぎない。もうひとつのパターンとしては、1991年まで地方党書記でもイスパルコム議長でもなかった新人が任命制導入時に市長・郡長として抜擢された例もある（**C 型**）。「最初に任命された市長・郡長」のうちサマーラ州では20%が、タンボーフ州では何と45%がこの型に属していた*12。

以上に見たように、1990年春の時点で（大動乱に見舞われた）スヴェルドロフスク州と（相対的に平穏だった）サマーラ州・タンボーフ州とが分化したとするならば、1992年にはサマーラ州とタンボーフ州とが分化したのである。サマーラ州知事チト

*11 以下に示される百分率の分母は、当該州の市・郡の総数ではなく、そのうち情報が把握された市・郡の数である。しかし、本稿が扱った2州については、ほぼ全ての市・郡の詳細な幹部異動が把握されたので、この計算法でも問題はないと考える。

*12 1996年首長選挙の勝利者の最初の就任時がいかなるものであったかは、次の表に示される通りである。

	現職の当選				1992-96年に 任命	新人の当選	計
	A 1	A 2	B	C			
サマーラ州	6 (17%)	9 (26%)	1 (3%)	5 (14%)	2 (6%)	12 (34%)	35 (100%)
タンボーフ州	1 (5%)	5 (23%)	0 (0%)	3 (14%)	6 (27%)	7 (32%)	22 (100%)

注意しなければならないことは、1992-96年に任命された者、また1996年選挙の新人当選者が、必ずしも1990年以降に台頭した者であるわけではないということである（たとえば、八月クーデター以降離脱していた旧党第一書記が1996年選挙で復活した場合もあり得る）。それも勘案するならば、この表は、旧体制エリートが、サマーラ州では1996年選挙以後に至るまで非常に安定的に生き延び、タンボーフ州ではそれに若干劣る程度に生き延びたということを示している。

フ、タンボーフ州知事バベンコのいずれもがマージナルなノメンクラトゥーラの出身である。しかし、チトフが、旧ノメンクラトゥーラ・コミュニティにおける自分の立場の弱さを自覚して、市長・郡長を任命する際に旧体制ボスに依存したとするならば、バベンコは、全く同じ弱さの自覚から、反対の行動をとったのである。つまり、彼は市長・郡長を任命するにあたって、標準的なキャリア・パターンをしばしば侵犯したのである。こうした幹部政策が地方エリートの第一層（「強い指導者」たち）を怒らせ、バベンコの立場をいっそう悪くした場合も稀ではなかった。全体としては、サマーラ州行政府は、タンボーフのそれよりも、1990年以前の地方エリートの生き残りとして地歩固めに有利な条件を提供したと言える。

本稿は、サマーラ州からは郡を、タンボーフ州からは市を抽出した。ソヴェトの廃絶後、エリツィンが市にのみ代議機関を再導入することを許したため、市は、1994年から96年にかけて、新たな（十月事件以後の）条件下で議会主義的経験を積むことができた。これは、同時期の郡において、いわば制度的真空の中で執行権力のみが機能していたのとは対照的である。また、1996年市長・郡長選挙前夜、つまり本稿が対象とした地方政治史のいわばクライマックスの時期は、自治憲章の検討時期と重なった。サマーラ州行政府は、市長・郡長が同時に市・郡議会議長をも兼任し、しかも郡長が域内の町長・村長の任命権を握る「極端に強い首長」制を自州に普遍的に導入する方向で、市・郡レベルにおける憲章検討過程を厳しく統制した。タンボーフ州においては、この自治憲章準備期（1995年）は、州レベルでの激しい政治闘争の時期と重なり、しかもその勝利者となった人民愛国派のリャーボフ知事は、サブリージョンレベルでのこれといった制度政策を持たなかったため、市・郡自治体は相対的に自由に自らの組織構造を決めることができた。

序章の最後に、本稿における市・郡のサンプリングについて説明しておかなければならない。サマーラ州から選ばれた3郡は、都市化の度合いを軸として並べることができる。そのことは、それぞれの郡庁所在地のステータスによっても計られる。つまり、もし当該郡が十分に都市化されていれば、その郡庁所在地は「州に直属する市」、つまり郡権力から独立し、郡権力と対等のステータスを持った市になる傾向がある。州都サマーラの東辺に接する別荘タウン（週末にはサマーラ市民の流入で実在人口が急増する）であるところのキーネリ郡がこれにあたる^{*13}。反対に、州都サマーラから南へバスで約1時間半行ったところにある典型的な農業郡であるクラスノアルメイスキー郡の郡庁所在地は、人口6千人の大村（selo）のままである^{*14}。この大村からさ

*13 人口約3万2千人のキーネリ郡は64集落から成り、12の村管区に分けられている//インタビュー：ゲンナデー・N・ゴレンコフスキー（Golenvskii）/キーネリ郡行政府長官、1995.06.23、キーネリ市。

*14 クラスノアルメイスキー郡の人口は約2万人、その43の集落は11の村管区に分けられている（イ

らに1時間バスで南下した位置、州の南端（サラトフ州との県境）にあるペストラフカ郡は、キーネリ郡とクラスノアルメイスキー郡の中間の範疇に属する。つまり、その郡庁所在地は「郡に従属する市」なのである^{*15}。

郡の権力構造もまた、これら経済的・人口学的構造を反映している。州都に隣接し産業と生活様式が分化したキーネリ郡において政治指導者がプロ化する傾向があるのとは対照的に、クラスノアルメイスキー郡の権力は域内の集団農業経営に著しく依存しており、郡権力の本質は、封建領主に類する集団経営指導者の連合権力であると言っても過言ではない。この事情は幹部異動にも反映するのであって、以下に登場するキーネリ郡の「強い指導者」たちの全てが郡レベルの行政官、政治家としての長期の修行を積んでからトップリーダーとなったのとは対照的に、クラスノアルメイスキー郡の「強い指導者」たちは、域内の有力集団経営の指導者から郡のトップリーダーに直接昇格したか、昇格を目指して挑戦している^{*16}。ここでもペストラフカ郡はキーネリ郡とクラスノアルメイスキー郡との中間型である。つまり、ペストラフカ郡の指導層は集団経営指導層からいちおう分離してはいるが、その反面では、郡最大の国営農場長でペレストロイカ期に郡党第一書記を務めた人物が過去十年にわたって郡のキングメイカーの役割を果たしてきたところが、この郡の特徴なのである。

これらサマーラ州の事例とは対照的に、タンボーフ州からピックアップされた3市は、経済的・人口学的構造においては同質的である。つまり、いずれも典型的な中規模工業都市である。たしかに、その主要産業が軍事・電機・化学などで、したがってそれらが1992年以降解体的な状況にあるコトフスクやウヴァーロヴォに比べれば、民生志向の軽工業が中心であるラスカーゾヴォ市はややましな状況にある。しかし、この違いもあくまで相対的なものにすぎない。むしろ、この3市は主体的な条件、つまり市政がどの程度党派的であるかという基準から抽出されたものである。その意味では、タンボーフ州から選ばれた3事例間の対照性は、（非競争的な）サマーラ州と（党派的な）タンボーフ州の間の対照性のミニチュアをなすかもしれない。

インタビュー：ニコライ・フォードロヴィチ・ブドーリン（Budorin）/クラスノアルメイスキー郡行政府長官、1995.06.27、クラスノアルメイスコエ村）。この郡は、1935年に設置された。概してサマーラ州南部は農業地帯であるが、その中でもこの郡は農産物国家納入量で州4位をしめる強力な農業郡である // *Krai otecheskii nad rekoi Chagroi* (Chapaevsk, 1995)。

*15 この郡は最大東西幅が110キロメートルにも及ぶ、ロシア的尺度によってもかなり広大な部類に入る郡である。郡人口約2万人、郡は八つの「郷」に分けられている // インタビュー：アレクサンドル・ペトロヴィチ・リュバーエフ（Lyubaev）/ペストラフカ郡行政府長官、1996.06.13、ペストラフカ市。

*16 ただしその反面では、これら指導者たちは、郡レベルの政治家となる以前に、集団経営の指導者と当該村の村ソヴェト議長・村長を兼ねていたから、村レベルとはいえ経営のみならず行政の修行も積んでいたことになる。アメリカ合衆国の大統領選挙に喩えれば、キーネリ郡が「副大統領が次期大統領に立候補する」型であるのに対し、クラスノアルメイスキー郡は「州知事が次期大統領に立候補する」型であるといえよう。

II. 事例研究

サマーラ州キーネリ郡

キーネリが全国的に有名なのは、モスクワからサマーラへと到達した鉄道幹線がウラルに向かう幹線と中央アジアに向かう幹線とに分岐する大きな鉄道分岐点があるからである。この分岐点付近の鉄道の幅は300メートル以上あり、地元の人々が「橋」と呼ぶ大きな陸橋が架かっている。鉄骨の上に厚板を置いただけ、しかもあちこちに大穴があいたものだが、なぜか畏怖堂々とした印象を与える陸橋である。上述の通り、キーネリ郡の中心であるキーネリ市は「州に直属する市」であり、郡から独立し、郡と対等の地位を有している。にもかかわらず、行政単位としてのprestigeは郡の方が高い。サマーラ州を舞台とする、奥田央の農業集団化についての大著^{*17}の中でキーネリ郡がしばしば言及されていることにも示されるように、1917年革命後こんにちに至るまで、この郡は農業技術革新、ガス普及などにおいて先進郡としての全国的な名声に浴してきた（もちろん、暴力的に遂行された農業集団化において「先進的」だったことは、郡の名誉をあまり高めないだろうが）。1995年に筆者がサマーラ州の現地調査を開始した際に州行政府が筆者を最初に派遣したのがキーネリ郡であった事実も、この郡が「ショーウィンドウ」としての役割を果たし続けていることを感じさせる。

〈図1〉を参照せよ。1987年6月、1930年生まれの郡党委員会第一書記アルカー

〈図1〉 キーネリ郡における指導者の異動 1985-1996

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
郡党第一書記	A. シチェルピーニン		G. ゴレンコフスキー										
郡党第二書記	V. ボグダーノフ		A. ラチャーエフ										
郡ソヴェト議長							G. ゴレンコフスキー	V. ピャトニツァ					
郡イェスバルコム議長、郡行政府長官	G. ゴレンコフスキー		V. ボグダーノフ				G. ゴレンコフスキー		Yu. ゼジン				
	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> ↑ 民主ソヴェト選挙 ゴルバチョフの兼任 </div> <div style="text-align: center;"> ↑ 第二の兼任 </div> <div style="text-align: center;"> ↑ 郡行政府長官 任命制導入 八月クーデター </div> <div style="text-align: center;"> ↑ 十月事件 </div> <div style="text-align: center;"> ↑ 郡長選挙 </div> </div>												

*17 奥田央『ヴォルガの革命：スターリン統治下の農村』、東京大学出版会、1996年。

〈表 1〉サマーラ州キーネリ郡の指導者の名声

	ペレストロイカ以前 (-1985)	ペレストロイカ期 (1985-1991)	ソ連共産党の廃絶から ソヴェトの廃止まで (1991-1993)	ソヴェトの廃止以降 (1993-1996)
第 1 位	シチェルビーニン 49 (郡党第一書記)	ゴレンコフスキー 57 (郡党第一書記)	ゴレンコフスキー 57 (郡行政府長官)	ゴレンコフスキー 63 (郡行政府長官)
第 2 位	ゴレンコフスキー 30 (郡人民統制委員会議長、 郡イスパルコム議長)	ユリン 21 (集団農場議長)	ゼジン 19 (郡農工コンプレックス議 長)	ラチャーエフ 19 (郡行政府農業部長)
第 3 位	ボグダーノフ 11 (郡党委員会指導員、郡人 民統制委員会議長)	ボグダーノフ 18 (郡イスパルコム議長)	メドヴェーデフ 15 (集団農場議長)	ユリン 16 (集団農場議長)
第 4 位	同点 3 位：ユリン 11 (集団農場議長)	メドヴェーデフ 17 (集団農場議長)	ユリン 14 (集団農場議長)	ヴォロントウイツェフ 12 (国営農場長)
第 5 位	メドヴェーデフ 10 (人民統制委員会議長)	ゼジン 15 (郡イスパルコム農業部長)	ボグダーノフ 12 (郡行政府長官)	メドヴェーデフ 6 (集団農場議長)

注：ゴシック数字は得点数を、括弧内は当時の役職を示す。本表及び以下の全ての表において、民営化後の集団農場、国営農場についても、旧称で示す。集団農場議長が「株式会社社長」に横滑りした場合が大半である等のよく指摘される事態を考慮すれば、実態の伴わない新名称を記すことはエリートの連続・非連続を検証するという本稿の目的を妨げるからである。

ヂー・シチェルビーニンが病死した。「類い希な視野を持った唯一の人物、いかなる場所でも誰とも比べられようがない人」と後にキーネリ郡病院長が回想した^{*18} シチェルビーニンの後継世代のうち「強い指導者」とみなされていたのは、郡イスパルコム議長ゲンナーヂー・ゴレンコフスキー(1949年生)、郡党委員会第二書記ウラヂーミル・ボグダーノフ(1946年生)、郡農工連合議長ユーリー・ゼジン(1948年生)であった。同年8月に開催された郡党委員会総会は、標準的なキャリアパターンに従って、ゴレンコフスキーをシチェルビーニンの後継者とし、ボグダーノフは、ゴレンコフスキーの後を承けて郡イスパルコム議長となった。この時期には、ゴレンコフスキー、ボグダーノフ、ゼジンのトロイカ体制は、少なくとも表面的にはノーマルに機能していた。

これら3人の指導者は、たまたま郡内に所在しているクイブィシェフ農業大学を卒業している点では共通しているが、ゴレンコフスキーのキャリアは際だっている。彼はオレンブルク州出身だが、1970年(21歳)、農業大学に在学中、共産青年同盟キーネリ郡委員会第一書記に選ばれ、6年間、この専従職にあった。1976年に短期間、郡人民統制委員会議長を務めた後、27歳の若さで郡イスパルコム議長になった^{*19}。つまり、ゴレンコフスキーは生産部門で働いたことのない純粋なアパラッチクである^{*20}。

*18 名声調査結果。

*19 Put' k kommunizmu, 1987.04.14.

*20 「アパラッチク(機関員)」とは、旧体制下のキャリア・パターンを表す隠語のひとつであり、「ハズヤイストヴェンニク(経営家)」の対語である。ハズヤイストヴェンニクとは、主に企業、集団農場などの経営機関で出世した人物(また、そこで出世した後、40歳前後で党・ソヴェトの幹部になった

また、市・郡統合党委員会第一書記にまで出世しながら（後述）、最後まで上級党学校で「第二の高等教育」を受けなかった点で例外的な人物である*21。名声調査によれば、1985年以前のゴレンコフスキーの「権威の理由」は、「イニシアチブ、粘り強さ、精力性」が5点で最多、「プロフェッショナルリズム」と「人への配慮と関心」とがいずれも3点でこれに続く。「党籍・党への献身」は2点である。逆説的なことだが、ペレストロイカ期について見ると彼の権威の理由として「党籍・党への献身」が最多（6点）となり、「イニシアチブ、粘り強さ、精力性」がこれに続く（5点）。いずれにせよ、精力的であることが彼の急速な出世の原因であったことは間違いない*22。筆者が1995年にゴレンコフスキーに最初に出会った際に受けた印象も（その1年後にこの郡で行われるところの）この名声調査の結果と矛盾するものではなかった。つまり、頭の回転が速く、如才なく、精力的な指導者だと感じた。その一方では、「巧言令色鮮なし仁」という格言も思い浮かんだが。

ボグダーノフは、ゴレンコフスキーとは対照的に苦労人である。農業大学を通信教育で修了、中等学校に労働実習教員として招かれた。労働実習教育畑でキャリアを積みながら、無給で党委員会書記を務めた。郡党委員会はボグダーノフを有給職員として何度も招いたようだが、彼は断り続けた。シチェルビーニン体制下でようやく郡党委員会の指導員として勤務し始め、その後は標準的なキャリアを辿った。つまり、郡人民統制委員会議長、郡党委員会第二書記を経て、郡イスパルコム議長となったのである。彼はイスパルコム議長時代にサラトフ上級党学校を修了した*23。名声調査によれば、1985年以前のボグダーノフの「権威の理由」は、「教養・文化水準の高さ」（3点）と「地元の利益擁護者」（3点）であり、ペレストロイカ期に入ると、「教養・文化水準の高さ」「人への配慮と関心」「イニシアチブ...」がそれぞれ2点で主な理由となる。「教養・文化水準」が高い評価を受けているのは、ボグダーノフが教育者出身

人物）を指し、アパラッチクとは、多くの場合共産青年同盟の有給職員から始まって党・ソヴェトの機関内で出世した人物を指す。社会主義社会は生産労働を重視する価値観の上に成り立っていたため、アパラッチクという隠語には否定的なニュアンスがある。次の拙稿参照：「ロシア地方指導者のキャリア・パターン—トヴェーリ州を事例として」石川晃弘、塩川伸明、松里公孝編『講座スラブの世界4：スラブの社会』、弘文堂、1994年、pp.299-332。

*21 ゴレンコフスキーからの聞き取り、1995.06.23、キーネリ市。上級機関からはさかんに入学を勧められたが、自分は「現実の学校」で学んでいるから、と断り続けたそうである。

*22 ちなみに、彼の前任者であるシチェルビーニンの「権威の理由」（1985年以前について）を見ると、「プロフェッショナルリズム」が5点で最多、「党籍・党への献身」「上位の指導者との人脈」「人を説得する力」がいずれも3点でこれに続く。ペレストロイカ以前の指導者の評判の方がむしろテクニクラト的であるという結果がこれらからは出ている。

*23 インタビュー：ウラヂーミル・ミハイロヴィチ・ボグダーノフ（Bogdanov）/株式会社「アグロプログレス」社長代行、1996.07.24、キーネリ市。

だからだろう。確かに、きらびやかな印象を与えるゴレンコフスキーとは対照的に、ボグダーノフは、知的で懇懇、観察力のある冷静な指導者であるように見えた。

地元出身のゼジンは、農業大学卒業後、集団農場の技術者、主任技術者を経て、1980年にキーネリ郡の生産連合「農業化学」の議長となった。1985年以降は、郡イスパルコム農業局長、郡農工連合議長などと役職名は変えつつも、要するに農業政策における郡の第一人者であった*24。他の2名の「強い指導者」と比べて、ゼジンは最も典型的なロシア指導者の雰囲気漂わせている。それは、恰幅の良さ、押しの強さ、やや感情的、それでいて頭の回転が速いといった資質である。筆者が1995年から翌年にかけて面談した、これら3人の指導者は、概して優れた人物が多いロシアの市・郡レベルの指導者の中でも突出した印象を与えた。これは、キーネリ市の政治指導者がやや軽い感じがしたのとは対照的であり、市よりも郡の方が格上というキーネリの特異性を納得すると同時に、この重量級の3人が激突した1992年当時の権力闘争がいかに熾烈であったか容易に推察されたのである。

1990年春、キーネリ郡のエリート再編に影響を及ぼす二つの出来事があった。ひとつは、ゴレンコフスキーがゴルバチョフの兼任方針に基づいて郡ソヴェト議長となったことである（これは順当な展開である）。もうひとつは、キーネリ市・郡の共産党委員会が統合されたことである。つまり、国家行政上は市・郡ソヴェトが並行して存在していたが、両者は単一の党委員会の指導を受ける建前となったのである。ゴレンコフスキーは、この統合党委員会の第一書記となった。つまり、ゴレンコフスキーは、ソヴェトに政治基盤を移しつつ党権力の低下に備え、同時に市・郡統合党第一書記としてキーネリ市政にも影響を及ぼそうとしたのである。ところが、おそらくゴレンコフスキーが市政にも守備範囲を広げようとしたこと、またボグダーノフが優秀な指導者であったことが作用して、1991年の第二の兼任方針はキーネリ郡では実現されず、**このためA1パターンからの逸脱が起こった**。8月にソ連共産党が消滅すると、ゴレンコフスキーは郡ソヴェト議長としてのみ残り、他方、郡イスパルコム議長の職務を大過なく果たしていたボグダーノフは、チトフ知事により郡行政府長官として任命された。権力の重心が立法権（ソヴェト）から執行権（行政府）へと刻々移りつつあることは明白であったから、ゴレンコフスキーとボグダーノフの間の序列は事実上逆転したのである。しかし、市・郡統合党委員会第一書記にまで登りつめたゴレンコフスキーが、ソヴェト権力と共に没落する運命を甘受するなどということはありえなかった。まさにこのようなとき、1992年夏、郡内の集団農場に機械、肥料等を供給する公営企業「アグロサービス」の私有化が争点となったのである。

1970年代、キーネリ郡は、ロシア共和国で五つだけ選ばれた先進郡のひとつとし

*24 *Kinel'skaya zhizn'*, 1996.11.19.

て、従来複数の企業体によって担われてきた農機・燃料・肥料関連業務を単一の組織に統合し、しかもその統合体を独立採算制で運営することを許された。これは1980年代の農工コンプレックス運動の先駆けとなる実験措置であり、公営企業「アグロサービス」は、そのとき以来の伝統を持つ。1992年、ボグダーノフ郡行政府長官とゼジン郡農工連合議長は「アグロサービス」の性急な私有化に反対した。ソヴェト議長ゴレンコフスキーは私有化を推進したが、郡ソヴェト自体はむしろボグダーノフ長官を支持して「私有化延期を求める決議」を採択した。しかし、その結果、チトフ州知事とボグダーノフの関係は悪化し、8月にはチトフはボグダーノフを解任してゴレンコフスキーを後釜に据えた。これにより、キーネリ郡は**1年遅れでA1型の幹部異動に回帰した**ことになる。

ボグダーノフと同意見であったゼジン郡農工連合議長は、ゴレンコフスキー新長官の下で働くことを潔しとせず、辞職して、ボグダーノフと共に農機・肥料供給、食品加工に従事する株式会社「アグロプログレス」を創設した（ゼジンが社長、ボグダーノフが副社長となった）。私有化された「アグロサービス」があっという間に没落したので（モスクワ資本に株を買い占められ自動車部品工場となった）、「アグロプログレス」は郡内で独占的な地位を得た。ボグダーノフとゼジンとしては、公営企業「アグロサービス」の存続の下で自分たちが追求したいと願った農業政策を株式会社「アグロプログレス」に舞台を移して継続することになったわけである^{*25}。

ゴレンコフスキーの「アグロサービス」私有化賛成論は、市場経済の優位に対する彼の確信から生まれたものではなく、この機会に州知事に取り入りたいという出世欲から生まれたものであると証言する者も地元にはいる。シチェルビーニン「親分」の下では一緒に働いていた3人の指導者が引き起こした激しい権力闘争は、郡政に禍根を残した。名声調査アンケートにも、1991-93年の欄に、「事実上、誰にも権威はなかった。権威は狭い人間関係の中だけで、郡規模のものではなかった」といった類の感情的な書き込みをした回答者が何人かいた。なお、ゴレンコフスキーは、かつて市・郡統合党委員会第一書記としての自分の指導下にあった市行政府に対しても尊大な態度をとり、市・郡両行政府の間にも緊張が生まれた^{*26}。

ゴレンコフスキーの後を継いだソヴェト議長は退役軍人であり、ゴレンコフスキーに挑戦することはなかった（概して、州ソヴェトが州行政府の目下のパートナーとしての地位に甘んじたサマーラ州においては、市・郡ソヴェトもそれに倣った）。<表

*25 ユーリー・ニコラエヴィチ・ゼジン (Zezin) / キーネリ郡行政府長官代行、1996.07.22、キーネリ市；また、前出のボグダーノフからの聞き取り、1996.07.24、キーネリ市。

*26 インタビュー：ワレンチン・ペトロヴィチ・タラソフ (Tarasonov) / キーネリ市行政府長官、1996.7.22、キーネリ市。

1 >が示すように十月事件後は並ぶ者もないかのように見えたゴレンコフスキーの命運は、1996年6月に突然に絶たれた。チトフ州知事は、ロシア大統領選第1回投票に際して、キーネリ郡の有効票の54.6%がズュガーノフに投じられたことを容赦せず、ゴレンコフスキーを解任したのである（エリツィン票はわずか23.3%）*27。しかもゴレンコフスキーは、解任後直ちに、汚職・背任行為を理由に逮捕・収監された。こうして、キーネリ郡は、**A 1型の幹部異動からは完全に逸脱**した。

ゴレンコフスキーの後継者を見つけるために、何名かの「強い指導者」が州都サマールに招かれて、チトフ州知事、ユーリー・ロゴイド州政府首相らの面接を受けた。ゼジンが長官就任の意志を表明し、6月末に彼が長官代行として任命された*28。チトフとしては、1992年に彼が行った人事政策が誤りだったことを4年の歳月を経て認めたことになる。その年の12月、ゼジンは、75.5%の圧倒的な支持を得て、郡の首長として選ばれた*29。

ゴレンコフスキーとの闘争にけりをつけて間もない頃、筆者はゼジンと面談したが、そこで彼は、ゴレンコフスキーの悲劇は党が幹部政策を誤ったところから起こったと述べた。郡にある農業大学の共産青年同盟活動でたまたま頭角を現したにすぎない若者をそのまま引き留めて、生産部門での経験を積ませないままに郡党第一書記にまで出世させたところが誤りだったのである。前任者のシチェルビーニン郡党第一書記には強引なところもあったが、「彼は少なくとも自分の仕事を知っていた。だから、住民が彼を思い出すときには、専ら肯定的に思い出すのだ」*30。

サマール州クラスノアルメイスキー郡

世代論の見地からは、クラスノアルメイスキー郡の幹部異動は特異な型を示している。<図2>が示すように、この郡では、ペレストロイカ初期に、1930年代後半生まれの指導者（アントーノフ郡党第一書記、クワソフ郡イスパルコム議長）が1950年代生まれの若い指導者（それぞれエリン、ワシン）にとってかわられた*31のだが、

*27 もちろん公式には、ゴレンコフスキーは、「郡でズュガーノフ票が多かったから」という理由で解任されたのではない。解任理由は、それに続いた逮捕の理由と同じく「財政上の規律違反」であり、しかも、これ自体は事実なようだ。ただし、州知事による解任決定文書も認めているように、「財政上の規律違反」の事実そのものは以前から周知のものであった（*Kinel'slkaya zhizn'*, 1996.06.27）。

*28 ゼジンからの聞き取り、1996.07.22、キーネリ市。

*29 *Samarskie izvestiya*, 1996.12.10.

*30 ゼジンからの聞き取り、1996.07.22、キーネリ市。

*31 1986年にエヴゲーニー・クワソフ郡イスパルコム議長が解任されたのは、州イスパルコムの決定を守らなかったためであるとされた。その後、彼はクラスノアルメイスキー灌漑管区長という降格された職に就き、1989年にはソ連共産党からも除名されてしまう（*Regiony Rossii.../tom 3/Samarskaya oblast', Iaroslavskaya oblast'...*, p.185-186）。

< 図 2 > クラスノアルメイスキー郡における指導者の異動 1985-1996

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
郡党第一書記	V. アントーノフ		P. エリン			ブド ー リ ン	N. サウーシュキン						
郡党第二書記	N. ワシン	エ リ ン	A. ゴンノフ										
郡ソヴェト議長						エ リ ン	N. ブド ー リ ン	V. ロマー ノフ					
郡イスパルコム議長、 郡行政府長官	E. クワソフ	N. ワシン			N. ブドーリン								
				民主ソヴェト選挙		ゴルバチョフの兼任	第二の兼任	八月クーデター	郡行政府長官 任命制導入	十月事件		郡長選挙	

1940年生まれのブドーリンが1990年に郡党第一書記に就任したことにより再老化が起こり、現在に至るのである。1950年生まれのズャトチンがブドーリン行政府長官に挑戦した1996年郡長選挙は再度の世代交代のチャンスでもあったが、ブドーリンが辛勝した。

1987年に37歳の若さで郡党第一書記に抜擢されたパーヴェル・エリンは、獣医出身の国営農場長、この年齢で州レベルで働いた経験も持つテクノクラートであった*32。<表2>が示すように、エリンは、彼が獣医であったペレストロイカ以前の時期に、後の党第一書記期に匹敵するような高い権威を既に獲得していた。彼の「権威の理由」としては、四つの時期を通して「プロフェッショナリズム」と「人に対する配慮」が主にあげられている。典型的なテクノクラートであると言えよう。1990年3月、郡党第一書記エリンはゴルバチョフの兼任方針に沿ってソヴェト議長に選出された。しかし、彼は間もなくサマーラ州ソヴェト副議長に抜擢され、郡レベルの党・ソヴェトの役職を放棄することになる。1990年春の選挙で成立した、タルホフ指導下の州ソヴェトは、後のチトフ行政府とは対照的に、テクノクラート志向、若手志向の強い人事政策を展開したので、エリンのような人物に白羽の矢が立ったのであろう。エリン

*32 エリンは、1950年、オレンブルク州に生まれ、サラトフ畜産獣医大学を卒業、スモレンスク州での勤務、兵役を経て、クイブィシェフ州（後のサマーラ州）アレクセーエフ郡の獣医となった。1978年（28歳）には州イスパルコム農業局の家畜疫病対策派遣隊長に抜擢され、4年間の勤務を経て、1982年にクラスノアルメイスキー郡のある国営農場の長となった。1986年にワシンがイスパルコム議長となった後を受けて郡党第二書記に抜擢、翌年2月にはアントーノフ第一書記が郡から出て行ってしまったので、その後継者となった（*Regiony Rossii.../tom 3/Samarskaya oblast', Iaroslavskaya oblast'...*, p.185）。

<表2>サマーラ州クラスノアルメイスキー郡の指導者の名声

	ベレストロイカ以前 (-1985)	ベレストロイカ期 (1985-1991)	ソ連共産党の廃絶から ソヴェトの廃止まで (1991-1993)	ソヴェトの廃止以降 (1993-1996)
第1位	シュレポフ 30 (イスパルコム農業部長)	シュレポフ 33 (同左)	ブドーリン 46 (郡行政府長官)	ブドーリン 49 (郡行政府長官)
第2位	エリン 28 (獣医局長)	ブドーリン 24 (国営農場長、郡党第一書記、郡ソヴェト議長)	シュレポフ 26 (郡行政府農業部長)	キャリアギン 30 (国営農場長)
第3位	クリコフ 25 (国営農場長)	エリン 23 (郡党第一書記)	キャリアギン 20 (国営農場長)	シュレポフ 19 (行政長官代理、農業担当)
第4位	ザダジン 12 (郡党委員会書記)	いずれも16で4位： キャリアギン(国営農場長)；クリコフ(国営農場長)	クリコフ 15 (国営農場長)	エリン 16 (国営農場長)
第5位	ブドーリン 11 (国営農場長)		ズャトチン 10 (集団農場議長)	クリコフ 15 (国営農場長)
第6位	クワソフ 9 (郡イスパルコム議長)	ワシン 9 (郡イスパルコム議長)	エリン 6 (郡消費協同組合連合農業部長)	シマンコフ 9 (郡行政長官代理)

の後を承けて、国営農場長から郡党第一書記に抜擢されたのが、エリンよりも10歳年上のニコライ・ブドーリンであった。

ブドーリンの経歴は、ロシアの農村エリートに典型的なものである。1940年生まれ、1958年、クラスノアルメイスキー郡の国営農場の機械化要員として働き始めた。1965年から68年にかけてタンボーフ市のソヴェト・党学校で学んだ後、郡党委員会組織部の指導員として2年間勤務した。その後、国営農場の支部 (otdelenie) ^{*33} 長となり、さらに同じ農場の党委員会書記、農場長と標準的な出世をした。農場党委員会書記の仕事の傍ら、1975年にはクイブィシェフ農業大学を修了している。1984年、ブドーリンは郡イスパルコム議長代理(つまり、クワソフの代理)に抜擢された。1986年のクワソフの失脚後は郡農工連合議長代理の職に移ったが、本人の言い分では「ペーパーワークにどうしても馴染めず」、1988年に以前とは別の国営農場の長になった。ブドーリンが与える印象もこの経歴を反映しており、大柄で百姓風の (muzhikovataya) 風貌、実務性、頭の回転の速さなどに特徴づけられる。名声調査によれば、ブドーリンの「権威の理由」は、1985年以降一貫して「必要な財源を見つける能力」(1995-91：3点、1991-93：6点、1993-：5点)と「プロフェッショナルリズム」(1995-91：2点、1991-93：4点、1993-：7点)が主である。そのほか注目されるのは、1991年以降の時期について「地元利益の擁護者」(1991-93：1点、1993-：3点)と「上位指導者との人脈」(両期について2点)が有意なウェイトを占めていることである。こうした「権威の理由」は、ブドーリンが典型的な経営者型の

*33 フルシチョフ期の集団農場・国営農場巨大化運動により巨大農場が出現すると、農場内部に集落単位(多くの場合、かつての集団農場単位)の生産組織が生まれ、「支部」と呼ばれるようになった。

指導者であることを示す。

ブドーリンは、1991年には、既述の郡党第一書記、郡ソヴェト議長職に加えて、第二の兼任方針に応じて郡イスパルコム議長をも兼ねた。その年の12月、彼は郡行政府長官に順当に任命された。こうして、クラスノアルメイスキー郡の幹部人事は、エリンからブドーリンへの交代にもかかわらず、**典型的なA1型の発展**をしたのである。ブドーリンが順当に郡行政府長官に任命され、立法・執行が再分離されると、郡ソヴェトはある法律家（ヴィタリー・ロマーノフ）を新議長に選んだ。しかし、この議長はブドーリンに全く挑戦せず、十月事件で失業して後は、最初は警察に、やがて銀行に職を得た^{*34}。1992年3月、チトフ体制下で自分の居場所を見失ったタルホフ州ソヴェト議長が辞任すると、エリン副議長もそれに倣い、地元のクラスノアルメイスキー郡に戻ってきた。エリンが郡政に復帰していれば、ブドーリンにとって手強いライバルとなっただろうが、彼は消費協同組合での仕事を経て、以前勤めていた国营農場の長（私有化されているので、正式には「株式会社社長」）に戻ったのみであった。

<表2>が示すように、ブドーリンは順調に自分の権力を固めていったが、1996年12月の首長選挙において思わぬ試練に曝されることになった。郡内の優良集団経営「ウリヤーノフ記念」農場議長にして当該村の村長、ロシア共産党員のウラヂーミル・ズャトチンの挑戦を受けたのである。ズャトチンは1950年生まれ、農業高専卒業後、生村の「ウリヤーノフ記念」集団農場で養豚員として勤め始め、半生をこの農場に捧げた人物である。クイブィシエフ農業大学と（おそらく近年）サマーラ大学法学部を修了している。1975年から5年間、郡イスパルコム農業局の科学技術情報専門家として勤務、1988年以降は上記農場の議長を務めている。5人の子持ちである^{*35}。厳しい経営環境の中で酪農・養豚などを発展させたことで、ズャトチンは郡で有名であった。経営成功の秘訣は、食品加工プロセスを経営に組み込んだこと（言い換えれば、食品加工業者の中間搾取を防ぐ措置を早期からとったこと）だったようである^{*36}。ズャトチンは「農業生産者の権利擁護のための集団行動サマーラ州会議」の議長として、「農村の危機克服のための農工コンプレックス勤労者の要求」文書を作成し、署名を集め、州行政府や州議会に働きかけたが、彼が共産党員であることが災いしたのであろうか、チトフ知事や大統領全権代表からは冷淡な反応しか返ってこなかった。これに対する憤りから、ズャトチンは本格的に政治に身を投じる決意をしたのである^{*37}。

選挙戦は熾烈を極めた。ズャトチンを人民愛国同盟の統一候補とするという共産党

*34 *Znamya truda*, 1996.11.12 ; ブドーリンからの聞き取り、1995.06.27、クラスノアルメイスコエ村。

*35 *Znamya truda*, 1996.11.26.

*36 *Znamya truda*, 1996.11.16.

*37 *Znamya truda*, 1996.11.26.

の決定に反して、共産党員の中からもうひとり、郡行政府農業局畜産主任を務めている人物が立候補したが、第1回投票で野党票を割るには至らなかったようである。共産党側は大統領選挙の余韻を首長選挙に持ち込もうとしたが、これに対してはブドーリン支持者が、「何でブドーリン氏が連邦規模の経済崩壊に責任が負えるの？」と難なく反論した。むしろ争点になったのは、その8月に採択されたばかりの郡自治憲章であった。憲章が「極端に強い首長」制と村長任命制を採用したことは、別にブドーリンのオリジナルではなく、既述の通りサマーラ州行政府が州の自治体に一律に要求した方針でもあった。しかし、クラスノアルメイスキー郡の政治史の文脈では、憲章批判は、独裁的な傾向を強めつつあるブドーリン個人への批判というニュアンスを持った。ズャトチン側は、郡代議機関の定員を現憲章にある7名から13名に増やし、またその行政府長官に対する統制力を強化すること、村長を公選制にすること、郡議員の名称を現憲章の「代表」から伝統的な「代議員」に変えることなどを公約として掲げた^{*38}。

ブドーリンはズャトチン派の集団経営指導者や共産党員に対する切り崩し工作をし、ある程度は成功した。つまり、人民愛国派は、「独裁的な行政府長官・対・これに抵抗する集団経営」という構図を創れなかったのである。このことによほど立腹したのか、最初は「そろそろ後進に道を譲るべき時ではないですか」などとソフトにブドーリンを批判していた郡のロシア共産党書記も、「仮面は投げ捨てられた」との悪罵をブドーリン支持の集団経営指導者たちに投げかけた^{*39}。ただし、これは逆効果だったようだ。選挙戦の熾烈さは、それに心を痛めたある老人が「わが郡のような小さな行政単位で首長は公選さるべきではない」との意見を新聞紙上で述べる程であった。

12月1日に行われた第1回投票は、ズャトチンが35.4%、ブドーリンが32.7%の得票で、ズャトチンの優位に終わった^{*40}。しかし、その2週間後に行われた決選投票では、約150票差で、現職ブドーリンがズャトチンを辛くも振り切ったのである^{*41}。

この選挙戦に至る経過を要約すれば、(1)ブドーリンはA1型(旧党第一書記)郡長の典型であり、(2)大統領選に際してはエリツィンを公に支持し、票を動員した。このこと自体は当然だとはいえ、決選投票においてさえエリツィン支持31.5%、ズェガーノフ支持64.5%であったクラスノアルメイスキー郡^{*42}においては、これは圧倒的な少数派に敢えて身を置いたことを意味する。(3)にもかかわらず、その半年後の自分が試される選挙では、「連邦政治と地方政治は別物」という構図を作り出すことに難なく成功し、左派的な集団経営指導者はもとよりロシア共産党員の切り崩しにさ

*38 *Znamya truda*, 1996.11.16; 1996.11.26.

*39 *Znamya truda*, 1996.11.26.

*40 *Samarskie izvestiya*, 1996.12.10.

*41 *Volzhskaya kommuna*, 1996.12.24.

*42 *Volzhskaya kommuna*, 1996.07.5.

え成功したのである。このような状況では、ズャトチンのような優れた対抗馬を得た場合にさえ、人民愛国派が勝つことは難しいだろう。

ひとつ強調しておかなければならないことは、この首長選挙に際して郡新聞『労働の旗』が各候補者の政見をほぼ公平に伝えたことである。これは、次に述べるペストラフカ郡において郡新聞『ステップ』が現職候補の宣伝機関紙であるかのような役割を果たしたのとは対照的である。これは、『労働の旗』がいくつかの地方企業から財政援助を受けており、郡行政府の補助金以外にも財源があるためであると考えられる。

サマーラ州ペストラフカ郡

世代論の見地からは、キーネリ郡政史は1945-50年生まれの世界内での闘争、クラスノアルメイスキー郡政史は二度に及ぶ(1986-90、1996)指導者若返りの失敗とまとめることげできる。これに対し、ペストラフカ郡においては、1936年生まれのソヴェト議長ワレンチン・ダヴィドキン(旧郡党第一書記)が1957年生まれのアレクサンドル・リュバーエフ現行政府長官に権力を禅譲したため、極端な若返りが起こった。別言すれば、1940年代生まれの世代は頭上を飛び越えられてしまったのである。

ペストラフカ郡におけるダヴィドキン体制が成立したのは1985年であった。<図3>も示すように、この年の7月、国営農場「マイスコエ」*43の議長だったダヴィドキンは、やがて郡党第一書記になることを前提に郡イスパルコム議長にリクルートされ、実際、わずか2ヶ月間の「研修」を経て、それまでのフォーミン第一書記(1939年生)に代わったのである。ダヴィドキンの経歴は、クラスノアルメイスキー郡のブドーリンのそれに類似した、経営者型幹部に典型的なものであるが、ただしよりエリート的なバージョンである。ダヴィドキンは、クイブィシェフ農業大学で農学者資格を得、兵役後の1958年以来、マイスコエ国営農場(その前身も含め)で働いている。トラクター管理係から始まって、農学者、農場支部長、農場党委員会書記、そして農場長と順調に出世し、ロシア共和国功労農業活動家として表彰され、郡党第一書記にまでなったのである*44。名声調査によれば、1985年以降のダヴィドキンの「権

*43 国営農場(こんにちでは「株式会社」)「マイスコエ」は、郡市ペストラフカから20キロほど離れたマイスカヤ郷にあり、かつてと比べればかなり規模縮小したこんにちでさえ850人の職員を抱える巨大農場である。元々は六つの独立した集団農場であったが、フルシチョフ期の集団農場合併・国営化運動の中でひとつの巨大国営農場となった。ただし、みぎと並行して村合併運動が展開され、「マイスコエ」でも集落がひとつ潰されたので、こんにちの「マイスコエ」は、五つの集落=農場支部から構成されている//ウラヂーミル・ニコラエヴィチ・ズャブレフ(Zyablev)郷行政府長官に案内されたマイスカヤ郷のエクスカーションより(1996.06.13)。

*44 インタビュー:ワレンチン・ミハイロヴィチ・ダヴィドキン(Davydkin)、1996.06.13。マイスカヤ郷。

< 図 3 > ペストラフカ郡における指導者の異動 1985-1996

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
郡党第一書記	フォーミン	V. ダヴィドキン					V. セナートフ						
郡党第二書記	ゾートフ	Yu. コワリョーフ				A. ビジヤノフ							
郡ソヴェト議長						V. ダヴィドキン	モスコヴィチエフ						
郡イスパルコム議長、 郡行政府長官	V. ゾートフ					コワリョーフ	ダヴィドキン	A. リェバーエフ					
I. シェルカーエフ	V. ダヴィドキン					民主ソヴェト選挙 ゴルバチョフの兼任	第二の兼任	郡行政府長官 任命制導入 八月クーデター	十月事件				郡長選挙

威の理由」は、「必要な財源を見つける能力」がトップであり（1985-91：5点、1991-93：5点、1993-：4点）、「地元利益の擁護者」がそれに続く（1985-91：2点、1991-93：3点、1993-：3点）。1991年以降については、「上位の指導者との人脈」が加わる（一貫して2点）。この「権威の理由」もまた、ダヴィドキンとブドーリンの間の類似性を物語っていると言えよう。ただし、このような能力の反面、ダヴィドキンには指導者らしい容姿と雄弁さが欠けている。彼が郡党第一書記になったばかりの頃は、演説が苦手な彼の演説原稿を郡党第三書記アントニーナ・ビジヤノフが添削し、「ここで声を高くして」などと指示を書き込んでいたそうである^{*45}。筆者がダヴィドキンから受けた印象も、良く言えば「いぶし銀」、悪く言えば「掴み所のない人」というものであった。

ペレストロイカ期のペストラフカ郡指導部は、1930年代生まれのダヴィドキンとウラジーミル・ゾートフ郡イスパルコム議長（1937年生）と、1940年代生まれのユーリー・コワリョーフ第二書記（前職は農業機械国家委員会の郡連合長）、ビジヤノフ第三書記^{*46}との二つの世代が組み合わさったものとなった。1990年春のソヴェト

*45 インタビュー：アントニーナ・アレクセエヴナ・ビジヤノフ（Bizhanova）/ペストラフカ郡行政府「慈善」センター長、1996.06.14、ペストラフカ市。

*46 1943年生まれ、ビジヤノフは、2歳のとき前線で父親を亡くし、母親と共に戦後の混乱期にペストラフカに流れてきた。クイビシエフ教育大を受験しに行くまで、大都市というものを見たことがなかったそうである（ペストラフカはクイビシエフ＝サマーラからバスでわずか2時間半の距離！）。教育大卒業後、フランス語教員としてペストラフカに戻り、23歳のときから郡ソヴェト執行委員会教育部に勤務した。28歳で入党、やがてフォーミン第一書記下の郡党委員会においてイデオロギー担当書記として働き、第三書記となった。これは、旧体制下の婦人活動家の典型的なキャリア・パターンである。なお、イデオロギー担当書記といっても、農村における文化啓蒙活動一般を

＜表3＞サマーラ州ペストラフカ郡の指導者の名聲

	ペレストロイカ以前 (-1985)	ペレストロイカ期 (1985-1991)	ソ連共産党の廃絶から ソヴェトの廃止まで (1991-1993)	ソヴェトの廃止以降 (1993-1996)
第1位	フロプシン 28 (郡党第一書記)	ビジャーノワ 27 (郡党第三書記)	コワリョーフ 36 (交通会社社長)	リュバーエフ 39 (郡行政府長官)
第2位	ビジャーノワ 19 (郡党委員会書記)	いずれも 23 で2位： ダヴィドキン(郡党第一書 記)；コワリョーフ(郡党第二 書記)	リュバーエフ 33 (郡行政府長官)	ダヴィドキン 27 (国営農場長)
第3位	ダヴィドキン 18 (国営農場長)		ダヴィドキン 26 (郡ソヴェト議長、国営農 場長)	ビジャーノワ 22 (「慈善」センター長)
第4位	フォミン 15 (郡党第一書記)	チルコフ 19 (集団農場議長)	同点4位(8)が3名： ビジャーノワ(「慈善」セン ター長)；コレンチェンコ (年金生活者、郡ソヴェト 議長助手)；アフアナシエ フ(集団農場議長)	コワリョーフ 15 (貯蓄銀行支店長)
第5位	コレンチェンコ 10 (郡イスパルコム議長)	コレンチェンコ 16 (郡イスパルコム組織部長)		ワシリチェンコ 9 (郡行政府長官代理)
第6位	同点(9)が3名：ヤンジン (郡イスパルコム議長)、チ ルコフ(集団農場議長)、ル ジェフスキー(郡党委員 会書記)	リュバーエフ 11 (郡農工連合議長)		
その他	コワリョーフ 6 (農業機械センター長)			

選挙においてゾートフは落選し、かわってコワリョーフが郡ソヴェト執行員会議長に選ばれた。ダヴィドキン郡党第一書記は順当に郡ソヴェト議長となったが、新生ロシア共和国執行部(エリツィン最高会議議長)の党・ソヴェト分離方針に呼応して、その年の9月には第一書記職を辞した^{*47}。クラスノアルメイスキー郡のブドーリンが第一書記職を返上したのが1991年6月であり、キーネリ郡のゴレンコフスキーに至っては第一書記職を最後まで返上しなかったのだから、ダヴィドキンは党の権力に早々に見切りをつけたことになる。ダヴィドキンが第一書記を辞めたとき、第三書記のビジャーノワが次期候補に浮上したが、彼女は(自分が女性であることを主な理由として)断り^{*48}、比較的無名の集団農場議長が第一書記となった。1991年に第二の兼任方針が打ち出されると、ダヴィドキンがソヴェト議長、イスパルコム議長を兼ね、コ

担当したようである。ソ連共産党の消滅後、1ヶ月間だけ元職のフランス語教員に戻ったが、ダヴィドキンにオファーされて、郡行政府の社会福祉関連部局であると同時に一種の独立法人である「慈善」の長として勤務し始め、現在に至る(本人からの聞き取り、1996.06.14、ペストラフカ市)。名声調査結果もこの経歴を反映しており、ビジャーノワの主な「権威の理由」は「教養・文化水準の高さ」(4期を通じて2点から5点)、「人に対する配慮」、「人を説得し、ついて来させる能力」、「プロフェッショナルリズム」(いずれも4期を通じて1点から4点)であった。

*47 *Regiony Rossii.../tom 3/Samarskaya oblast', Iaroslavskaya oblast'...*, p.189.

*48 これはビジャーノワ自身の言い分だが、当時の政治情勢に対する危惧から断ったと考える方が自然ではないだろうか。概して、ロシアの各地で1990年春の民主選挙以降に党第一書記に選出された人々は、それ以前の第一書記とは全く異質の人物たちであり、不人気な職の押しつけ合いに敗れて選出されたという性格が強かった。

ワリョーフはその第一代理となった^{*49}。以上に明らかなように、めまぐるしい官職上の変更にもかかわらず**A1型のキャリア・パターンが踏襲されると同時に、「ツァーリ・ダヴィドキン、プリンス・コワリョーフ」という序列が常に守られているのである。**

しかし、ダヴィドキンは内心ではコワリョーフを自分の後継者にする意欲を失っていた。コワリョーフは「成長しすぎ (pereros)」、自立的な行動が目立つようになっていったのである^{*50}。コワリョーフにかわってダヴィドキンが目をかけ始めたのは、当時、郡農工連合議長であり、自分より20歳以上年下だったアレクサンドル・リュバーエフであった。1957年生まれのリュバーエフは、1982年(25歳)にはサマーラ計画経済大学を卒業し、ペストラフカ郡のある集団農場の経済専門家となった。やがてその集団農場の党委員会書記となり、ここでダヴィドキン郡党第一書記の目にとまって郡農工連合副議長に抜擢されたのである。1989年には32歳で農工連合議長となり、その翌年には郡ソヴェト代議員に選ばれた^{*51}。リュバーエフは開けっぴろげな点で新世代の指導者にふさわしく、好感の持てる人物であるが、ややべらんめえ調なところがあり、人によっては受け容れられないかもしれない。

チトフ知事がダヴィドキンを郡行政府長官に任命するに違いないと思いこんでいたコワリョーフは、自分は郡行政府長官に立候補しない、農業機械部門に帰ると度々表明していた。しかし、水面下でダヴィドキンがチトフに推薦していたのは、自分自身ではなくてリュバーエフであった^{*52}。郡行政府長官候補を決める郡ソヴェト総会において、ダヴィドキンは初めて公にリュバーエフを推した。そこで、コワリョーフは、自分が辞退を表明していたのは、ダヴィドキンが立つと思っていたからである、リュバーエフが立候補するのなら自分も立候補すると述べて自薦した。ここまで言われては、リュバーエフも引くわけにはいかない。投票の結果、定数50人の郡ソヴェトは真二つに割れ、僅差でリュバーエフが勝った。リュバーエフは、指導者的な立場にある代議員にとっては「ダヴィドキンが推している」という一点で抗いえない候補者であったし、地位の高くない代議員にとっては、コワリョーフよりも身近に感じられる新鮮な候補者であった^{*53}。チトフ州知事は、ダヴィドキンの非公式な推薦と郡ソヴェ

*49 *Regiony Rossii.../tom 3/Samarskaya oblast', Iaroslavskaya oblast'...*, p.190.

*50 ビジャーノフからの聞き取り、1996.06.14、ペストラフカ市。

*51 リュバーエフからの聞き取り、1996.06.13、ペストラフカ市。筆者がリュバーエフ郡行政府長官と最初に面談したのは1996年のロシア大統領選第1回投票の直前であったが、時節を反映して、彼は1991年以前の社会体制を盛んに批判していた。

*52 ダヴィドキンからの聞き取り、1996.06.13、マイスキー郷。

*53 リュバーエフ(1996.06.13、ペストラフカ市)、ビジャーノフ(1996.6.14、ペストラフカ市)からの聞き取り。

トの正式な意志決定を受けて、リュバーエフを郡行政府長官に任命した。1992年にはダヴィドキンがソヴェト議長を辞し、自分の国営農場＝株式会社「マイルスコエ」に帰ったが、リュバーエフを通じて、郡政における隠然たる影響力を保つことになった。ダヴィドキンの後を承けてソヴェト議長となったナターリヤ・モスコヴィチュワは、十月事件の後にはリュバーエフの代理の一人となった。

<表3>が示すように、リュバーエフが自らの権威を固めていった過程は、キーネリ郡のゴレンコフスキーやクラスノアルメイスキー郡のブドーリンと比べてゆっくりしたものであった。ここでは彼の若さが災いしたであろう。そのような彼にとって1996年の首長選挙は深刻な試練であった。恐るべきは、ビジャーノワやコワリョーフのような「強い指導者」が立候補し、それがロシア共産党の大衆動員と結びつくことであった^{*54}。しかし、リュバーエフにとっては幸いなことに、両名共に政治への情熱を失っており、郡長選に立候補したのはリュバーエフよりも格が低いことが一目瞭然な人物ばかりであった。にもかかわらず、郡行政府の新聞『ステップ』は、ライオンが兎を全力で倒すかのようにリュバーエフ寄りのキャンペーンを繰り広げた。他の候補者がこれに苦情を述べると、郡新聞は、「今日の世界で、独立した新聞なんてものの名前をひとつでもいいから挙げる人がいますか。いかなる国でも、新聞の内容は、その新聞に財政援助している人が決めるのですよ」と聞き直った^{*55}。

このような偏向性にもかかわらず、郡新聞に掲載された郡名望家、特に集団農場経営者たちのリュバーエフ支持表明は、彼の強みを考察する上で興味深い材料を提供している。特に注目すべきは、“いま別の長官を選んだとすれば、最低限2、3年の新任者の学習、つまり郡にとっての停滞は不可避である”という主張である^{*56}。これは政権交代一般を拒否する議論に転化しかねないという点では、あまり民主的なものではない。しかし、ペストラフカの政治史の文脈に照らせば、そこから、地方名望家たちには自明な一つの含意を読みとることができる。つまり、“自分たちがこの若い指導者を育てた。彼には問題もあったが、自分たちは辛抱して、何とか彼を一人前にした。彼には州権力とのコネもできた。まさにこれからが投下資本の回収期だ”というニュアンスである。リュバーエフは、58.5%の得票率で、第1回投票で勝利を決めた^{*57}。

サマーラ州の3郡を概括するにあたって面白いのは、<表1～3>と1996年にそれら郡行政府長官を襲った運命とが逆相関の関係にあることである。最も高い名声を

*54 1996年6月に筆者がペストラフカで調査した際に、リュバーエフ長官は、「ビジャーノワやコワリョーフとの面談をセットしてあげるけど、そのかわり彼らが首長選挙に出る気があるかどうか後に私に教えてください」と言った。もちろん冗談ではあったろうが。

*55 Step', 1996.11.20.

*56 Step', 1996.11.2; 1996.11.6; 1996.11.16.

*57 Samarskie izvestiya, 1996.12.11.

誇ったゴレンコフスキーが地位を失ったばかりか刑事犯罪人とされ、ゴレンコフスキーに継ぐ名声を博したブドーリンが郡長選では思わぬ苦戦を強いられた。レーティングにおいて最も劣っていたリュバーエフが、対抗エリートの動向に最も気を遣い、選挙への準備を怠らなかつたことによって安定的な勝利を得たのである。指導者の驕慢には鉄槌を下すメカニズムが機能しているという点では、ロシアの地方政治にもデモクラシーが定着しつつあると言えようか。

タンボーフ州コトフスク市

コトフスク市は、州都タンボーフの東隣に位置する、人口4万人弱の中規模都市である。この市の起源は、第1次世界大戦の直前にこの地に開設された国营火薬工場である。1940年、コトフスクは町から市へと昇格した。第二次世界大戦後のコトフスク市は、軍需生産を基本としつつも、動員解除によって得られる安い労働力を使って、人工皮、建設資材、電気製品、塗料などを生産するようになった^{*58}。こんにちにおいては失業率が約17%にも達し、後出のウヴァーロヴォ市と並んで、タンボーフ州でも最も経済情勢が厳しい地域である。また、市の化学工業がもたらす有害労働の結果としての「若年年金生活者」の数も多く、市の左翼性に拍車をかけている。コトフスクは、タンボーフ州において唯一、郡部後背地を持たない純粋な工業都市である（つまり、「コトフスク郡」は存在しない）。したがって、市民にとっては「自分の腕」だけが生活の糧であり、郡部を持つ市におけるようなプチブル、小所有者的な感覚が欠けている。まさにこのプロレタリア性が、この市が社会主義末期には反共的な気分が席卷され、逆に、1992年以降の資本主義体制下では「ロシアで最も赤い州の中の、最も赤い都市」となった背景をなすと説明されている^{*59}。1996年末の時点で、市の共産党員数156名、党規約に基づく公式のシンパ（sochuvstvuyushchie）が300名から400名とのことである^{*60}。

この市は、1995年の3月から12月まで州知事を務め、こんにち「我らが家ロシア」の州指導者でもあるオレグ・ベーチンの出身地（生地ではないが、1988年から91年までこの市の党第一書記を務めた）として知られている。我々の関心を引くのは、この市の憲章が、執行権力が優位にあるこんにちのロシアにおいては例外的な南ドイツ型＝ビュルゲル・マイステル制を採用していることである。市政は著しい政党化の様

*58 インタビュー：イーゴリ・オレゴヴィチ・ポポフ（Popov）/コトフスク市ソヴェト議長、1996.12.9、コトフスク市。

*59 これは、ロシア共産党市委員会書記でもあるポポフ市ソヴェト議長、「我らが家ロシア」派の市指導者であるルゴフスキフ（後出）双方が認めていることである。

*60 ポポフからの聞き取り、1996.12.9、コトフスク市。

< 図 4 > コトフスク市における指導者の異動 1985-1996

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
市党第一書記	V. チュリロフ			O. ベーチン			N. ルゴフスキフ						
市党第一書記	E. スコサリョフ				N. ルゴフスキフ		N. ルゴフスキフ						
市ソヴェト議長、 市集会議長					O. ベーチン		N. ルゴフスキフ		I. ボポフ				
市イスパルコム議長、 市行政府長官	R. クリチェンコ	G. ロボダーノフ				V. スーリコフ							
	民主ソヴェト選挙 ゴルバチョフの兼任				第二の兼任		八月クーデター 郡行政府長官 任命制導入		十月事件		郡長選挙		

相を呈している。人口わずか4万弱のまちなのに、市行政府が発行する『我らが報知』、共産党市委員会が発行する『灯台』、そして「我らが家ロシア」系の『我らが家コトフスク』という三つの政治新聞が存在する。共産党だけではなく、「我らが家ロシア」派も強いのである。

< 図 4 >を参照せよ。オレグ・ベーチンは1950年、タンボーフ市に生まれた。タンボーフ化学機械工業大学を卒業、カルポフ名称モスクワ物理化学研究所で修士号を取得し、1981年以降、党専従職員となった。ペレストロイカ期には州党第一書記エヴゲーニー・ポドリスキーの秘書を務め、1988年11月、コトフスク市党第一書記となった。典型的な「田舎のプリンス」の経歴である。1990年春、新しく選出された代議員50名の市ソヴェトは、ゴルバチョフの兼任方針に従って、ベーチンをソヴェト議長に選出した*61。イスパルコム議長としては、1987年以来この任にあったゲンナーデー・ロボダーノフを再任し、しかも翌91年のコトフスク市においては第二の兼任方針は実施されなかった。つまり、クーデター直前までロボダーノフがイスパルコム議長を務めたのだが、8月に彼は元職に帰り、市外に転出してしまった。これに代わって、市ソヴェトは、建設業界の出身で、それまでイスパルコム議長代理=住宅・公共サービス担当であったヴァチャスラフ・スーリコフ（1954年生）を議長職代行

*61 Dmitrii Sel'tser, "Tambovskaya oblast' (1989-1995): Razvitie politicheskoi situatsii," K. Matsuzato and A.B. Shatilov (eds.), *Regiony Rossii - Khronika i rukovoditeli* /1/ "Krasnyi poyas" (tsentral'noe chernozem'e), Occasional Papers on Changes in the Slavic-Eurasian World, No.33 (Sapporo, 1997), pp.148-149.

に選出した^{*62}。その12月、バベンコ州知事は、スーリコフを市行政府長官に順当に任命した^{*63}。スーリコフが1990年ビッグバン以前からイスパルコム議長代理を務めていたことに注目するならば、コトフスク市の幹部異動はA2型に分類されるだろう。

八月クーデターの直前には、市党機関の側も指導者が交替した。国家機構の非党化に関する7月22日付ロシア大統領布告を理由として、8月13日の市党委員会総会においてベーチンが市党第一書記を辞し、ソヴェト議長職に専念することになったのである。これに替わって、それまで第二書記だったニコライ・ルゴフスキフ（1954年、隣のリペーツク州生まれ）が第一書記となった^{*64}。むろん、この後10日足らずで共産党そのものが崩壊するわけだが。1991年12月にバベンコが州知事に任命されると、市ソヴェト議長だったベーチンはその第一代理（第一副知事）に抜擢され、議長職を辞した。市ソヴェトは、ルゴフスキフをその後継者に選んだ。

現在「我らが家ロシア」派の市指導者であるルゴフスキフは、後出のイーゴリ・ポポフ（1942年生、現ロシア共産党市書記）と並んで、コトフスク市政史の二大ヒーローの一人である。皮肉なことに、こんにち政敵である彼らはいずれもヴォロネジ大学を卒業し、コトフスクの「ソ連邦50周年記念」電機工場（民営化後に「アルマズ」電機工場と改称）で働いた先輩・後輩の間柄である。ルゴフスキフは1980年に市党委員会の専従職員となったが、ポポフは工場に留まって工場の党委員会の書記になった。ルゴフスキフは、1985-87年にはロストフ・ナ・ドヌー上級党学校で第二の高等教育を受け、1989年3月には、ベーチン党第一書記下で第二書記となった^{*65}。旧体制下のルゴフスキフは、テクノクラートの発想から党指導者の職を選んだにすぎず、1992-93年の市ソヴェト議長時代には既に左翼的な信条の持ち主ではなかった。本人の言によれば、1989、90年頃には、社会主義システムは根本的に変えざるを得ないと実感したそうである。1992年以降の彼のイデオロギー的なスタンスを定式化すれば、中道的な国家主義者とでも言えようか。したがって、彼がこんにち「我らが家ロシア」の地方指導者であるからといって、連邦レベルでの「改革路線」の支持者であるわけではない^{*66}。逆に言えば、ルゴフスキフは、社会主義時代の自分が誤った人生

*62 市党委員会はこの決定を承認しなかった。その理由は不明だが、おそらく、後出のルゴフスキフ指導下の党委員会がスーリコフの資質をあまり評価していなかったのだろう。もちろん、この直後に共産党そのものが消失したので、スーリコフはイスパルコム議長職に難なく就いた。

*63 ポポフからの聞き取り、1996.12.9、コトフスク市。

*64 *Leninskii put'*, 1991.08.17.

*65 インタビュー：ニコライ・イワノヴィチ・ルゴフスキフ（Lugovskikh）/連邦出納庁（federal'noe kaznacheistvo）コトフスク支局長、1997.04.17、コトフスク市。

*66 たとえば、州新聞『タンポフ生活』のインタビューに答えて、彼は次のように述べている。「ロシア経済の系統的な解体を政策とみなすことはできない。ロシアの競争相手、ロシアの敵のみが、我々

を歩んでいたとは考えない。彼は、こんにちに至るも、ソ連の経済改革について「中国型の道」の成功可能性はあった、党の最高指導（つまり、ゴルバチョフ）の弱点からそれは実現されなただけであるという認識を持っている。ルゴフスキフは、1993年に市ソヴェトが廃止されて後は、連邦出納庁（federal'noe kaznacheistvo）コトフスク支局長となった。支局長の職務の傍ら、経済学修士号を取得している。

1992-93年のコトフスクにおいては、スーリコフ長官下の市行政政府よりもルゴフスキフ議長下の市ソヴェトの方が高い権威を誇っていた。学歴が高く、雄弁で、容姿端麗なルゴフスキフに対し、スーリコフは典型的なイスパルコム型（どぶ板型）の指導者であった。9名の代議員によって構成されていた当時の市ソヴェト「小ソヴェト」*67は、市内の代表的3企業*68の経営者を含み、ルゴフスキフ自身の回想によれば「ちょうど共産党市委員会ビューローのような役割を果たしていた」。ルゴフスキフ議長は、スーリコフ行政政府長官からの一種の嫉妬を感じていたとのことである。

1993年にロシア共産党が合法化されると、コトフスク党組織も「再建」された。その立役者となったのは、当時「アルマズ」電機工場の副工場長であったポポフであり、彼は自ら市委員会書記となった*69。ポポフは、「再建」後のロシア共産党の全ての大会に代議員として出席している。ロシアの政治指導者の多くが熊を連想させるとすれば、ポポフは狐である。まず（筆者によるインタビュー時）54歳という年齢は、ロシアのこのレベルの指導者としては例外的な高齢であるし、中背で痩せており、度のきつい遠視（老眼？）眼鏡をかけ、チャップリン髭を生やしている。筆者が初めて市行政政府を訪問したとき、行政政府幹部のところではなくソヴェト議長のオフィスにまず通されたのにも戸惑ったが（この市がビュルゲル・マイステル制を採用していることは知っていたが、どの程度ソヴェトが強いかにについて具体的なイメージを持たなかったのである）、そのオフィスで、どう見ても「強い指導者」には見えない初老の紳士を紹介されたときには、インタビューを早々に切り上げて帰ろう、としか筆者は思わなかった。ところが、20分も話すうちに、ポポフの的確な受け答えと、無駄と虚飾の

が既に医療品と食糧における自立性を喪失したことに利益を感じているのだ。... 自己欺瞞は止めよう。残り少ない原燃料を投げ売りし、債務奴隷となることによって、ロシアはかろうじてもっているにすぎないのだ」（*Tambovskaya zhizn'*, 1996.11.22）。このインタビューについて、「こりゃまるで人民愛国派の現状認識だ」と筆者が本人に述べたところ、「共産主義の色合い抜きに愛国者であることはできないとお考えですか」というのが彼の答えだった（1997.04.17、コトフスク市）。

*67 ソヴェトが常設議会ではなかったことを補うために1991年に導入された機関。代議員総数の約5分の1で構成され、ソヴェトの会期以外の期間においてソヴェトの権限をある程度代行した。

*68 当時は、「アルマズ」電機工場、プラスチック工場、塗料工場。やがて、電気工業がほぼ壊滅したことから、「アルマズ」電機工場に替わってパン工場が市内3大企業の一角をなすようになった。この3企業からの税収だけで、市歳入の65%を占めると言われる。

*69 ポポフからの聞き取り、1996.12.9; 1997. 0 4.17、コトフスク市。

ない弁舌に驚かされ、これはただ者ではないと思い知らされたのである。

コトフスク市は、それが抱える業種ゆえに（特に電機工場）ショック療法の被害を1992年時点でもろに被った。こうした中で共産党市組織が「再建」されたことは時宜に適ったことであった。とはいうものの、市ソヴェトは、経済改革の基本路線を支持し、域内の企業家との良好な関係を保つルゴフスキフの指導下にあった。皮肉なことに、ソヴェト廃止を命ずる大統領布告は、困難な政治環境下でエリツィン派の活動拠点となっていた、まさにこのソヴェトを潰したのである。また、ソヴェトの廃止のせいで市エリート内の左右対立は決定的なものとなった。

1994年3月27日に行われた選挙の結果、9名の代議員が選ばれて「市集会」が成立した。9名の党派構成は、ほぼ完全に親共産党的なものであり、社会的には企業経営者が一人も含まれていなかったところが特徴であった。市集会は、ポポフを議長として選出した。同時期の州議会選挙結果にも示されたことだが、タンボーフ州においては、十月クーデターは左翼勢力をかえって蘇生させたのである。市集会は、1996年12月に改選されるまでの2年半に21会期、つまり非常に活発に招集された。1994年市集会選挙の後、エリツィン大統領は、市行政府長官が市代議機関の議長を兼ねることを命ずる布告を発し、この方針は、1995年連邦地方自治一般原則法が採択されるまで全国的に（本稿で扱うタンボーフ州の他の2市、ウヴァーロヴォ、ラスカーゾヴォも含め）実行された。しかし、コトフスク市においては布告は無視され、ポポフが議長であり続けた。市集会は、自らの組織・運営に関する「時限規程」を採択し、1995年12月に市憲章が採択されるまでは、それに基づき活動した。この「時限規程」は十月クーデター体制のたけなわに採択されたものとしては例外的に、地方議会に大きな権限を認めるものであって、1995年8月の連邦地方自治一般原則法の採択後もその見直しをほとんどしないままに、その内容を市憲章に組み込むことができた程であった^{*70}。1995年12月27日には市憲章が採択され、これに基づいて市集会は「市ソヴェト」という栄えある旧称に復帰した。市ソヴェトは法人格を獲得し、銀行口座を開き、議長を有給専従職とし、さらに議会事務局を開設した。市憲章は市ソヴェトの代議員定数を15名と定め、市憲章採択の1年後、1996年12月に選挙が行われた。市集会には3つの常設委員会^{*71}が組織された。議会事務局は3部^{*72}から成り、1997年4月時点で11名もの職員を抱えていた（ちなみに、市行政府職員数は48名）。

*70 ポポフからの聞き取り、1996.12.9、コトフスク市。

*71 市民の生活関連事項委員会、予算委員会、青年・教育スポーツ委員会。

*72 (1) 組織統制部、(2) 諮問・法律部、(3) 統制・会計検査部である。(1)はソヴェトの議決の執行状況を統制する。(2)は、州ソヴェト、連邦議会下院、サラトフ法律アカデミーなどと相談しながら、ソヴェトの活動および議決の遵法性を保障する。(3)は、本文中後出。

議会議務局 3 部のうち、統制・会計検査部は、市財政の会計検査という枠を越えて、市の行政過程に直接関与している。たとえば、企業の経営状況を調査して市への納税能力を審査する、自治体企業が市に行う料金請求の適切性を審査する^{*73}、税支払い能力を持たない（と主張する）企業との間での「相殺 (vzaimozachet)」が過度に行われることにより自治体財政が悪化する^{*74}ことを防ぐために、市行政府長官に働きかけてこれを制限する措置をとらせる等が活動例である^{*75}。当然ながら、この部の存在は市ソヴェトと企業経営層との関係を緊張させ、1996年12月の市長・市ソヴェト選挙の争点の一つとなった^{*76}。

コトフスク市の憲章体制がこのようなものとなったのは、ルゴフスキフに言わせれば、政治基盤と指導力を欠いたスーリコフ市行政府長官が議会の支持を求めて共産党に譲歩しすぎたためである（スーリコフ自身は無党派である）。他方、ポポフによれば、コトフスクが純プロレタリア的な都市であること、対立を緩衝する郡域が存在しないことから、立法・執行権力間にまんいち対立が起こった場合、その弊害が甚大となるおそれがあるので、権力統合型の自治制度を導入する必要があったとのことである。1996年市長選挙勝利後のスーリコフは、共産党から自立した自前の政治基盤を形成しようとして、「二つの炎の間でゲームしている」が、時既に遅しの感は否めない。

1996年12月に行われた市長選挙には6人の候補が出馬したが、事実上、人民愛国派が推すスーリコフと、「我らが家ロシア」派が推すルゴフスキフとが四つに組んだ。

*73 たとえば1996年度には、暖房料金の水増しがこの部によって摘発され、暖房会社は市に巨額の払い戻しをせざるを得なかった。

*74 たとえば、貨幣で納税する能力がない（と主張する）塗料会社が、自社の社内売店でのみ使える金券で「納税」する。市行政府は自治体職員にその金券を「俸給」として払う。しかし、その社内売店の商品価格は、バザールのそれよりもずっと高く、事実上、この金券は貨幣の代わりにはならない。さすがにペンキは安く買えるが、自治体職員の家は既にペンキで溢れかえっている（統制・会計検査部長レオニード・ニコラエヴィチ・リャーリン (Lyalin) からの聞き取り、1997.4.17、コトフスク市）。

*75 統制・会計検査部は、1996年4月にその規程が採択され、6月にレオニード・リャーリンが部長に任命されて活動を開始した。リャーリンは1958年生まれ、大工として働いた後、ラブファク（勤労青年向け進学予備校）を経てイルクーツク大学で法学教育を受けた。医師である配偶者がコトフスクに配属されたのに伴い、リャーリンも1991年の大学卒業後、コトフスクで職を探し、最初に警察署、のち税務署に勤務した。1995年、コトフスク市ソヴェト事務局が形成されると同時に法律専門家としてリクルートされ（俸給は激減したそうである）、1996年にこの部に移った。法学士資格、刑事・税務署員としての勤務体験から、この職務に適材ではあるが、立場上、ポポフ・共産党の手先とみなされがちで、職務に弊害をきたすこともあるようである（本人からの聞き取り、1997.04.17、コトフスク市）。

*76 リャーリンからの聞き取り、1997.04.17、コトフスク市；ヴィクトル・ボリソヴィチ・ミハイロフ (Mikhailov) / コトフスク塗料工場社長、1997.04.16、コトフスク市。また、1996年の市ソヴェト選挙を前にして、ポポフ議長も、企業経営層が政治的に活発化したのは、徴税を目的とした企業の監査権を市憲章が市自治体に保障したからであると述べた（1996.12.9、コトフスク市）。

ルゴフスキフは、(電機工業などの急速な回復を期待することは現実的でない)周辺村を集めて「コトフスク郡」を形成し、市部において食品加工業を発達させるという、なかなか魅力的な政策を掲げた。結果は、スーリコフが有効票の56% (8,415票)を獲得して当選、対するルゴフスキフは21% (約3,230票) 得票した*77。20%近い失業率の中でこれだけの票が「我らが家ロシア」系の候補に投じられたことは画期的なことではあるが、それでも、これがルゴフスキフにとって明白な敗北であることには違いない。こうした選挙結果には、共産党が住民に強い影響力を持っていることその他に、いくつかの要因が考えられる。第一に、十月事件後、ルゴフスキフが連邦出納庁という住民との接点のない職場*78に移ったのに対し、スーリコフは、現職の行政官として日夜住民と接した。第二に、コトフスク市の「我らが家ロシア」派は、結局のところ、エリツィン・チェルノムィルヂンの地方代理人とみなされている。これは、タンボーフ州では致命的である。共産党市委員会の機関紙名が『灯台』という文学的な、ありふれたものであるのに対し、彼らの機関紙の名前が『我らが家コトフスク』というのも、いかにも不首尾である。第三に、元・市党第一書記というルゴフスキフの経歴もマイナスに作用する。「旧黨員-変節者は信用できない」という人民愛国派の口コミは、タンボーフ州においては、州知事選挙におけると同様、市長選挙においても効果的だった。

市長選と同日に行われた市ソヴェト選挙には、人民愛国派系の選挙ブロック「灯台」*79が代議員定数通りの15名の候補を立てたのに対抗して、市内3大企業の経営者がそれぞれ別々に選挙ブロックを組織し、候補を立てた。ルゴフスキフと並ぶ「我らが家ロシア」派の指導者である塗料工場社長は単独で15名の候補者を立て、プラスチック工場社長が6名、パン工場社長が2名の候補者を立てた。ただでさえ基礎票で共産党に劣っているのに、企業経営者間で候補者調整ができなかった時点で、彼らの敗北は既定のことであった。実際、選挙結果は、ブロック「灯台」から9名、企業経営者側から4名、中立系1名というものになった。共産党市組織は、たんに勝つだけでは飽き足りず、企業経営者側の選挙ブロックに巧妙に票を回して、それぞれから一人ずつ、社長本人だけが当選するように仕組んだようである。その結果、代議員に当選し

*77 タンボーフ州選挙管理委員会のプロトコール。

*78 連邦出納庁は、リージョン権力が税の上納を連邦権力との取引材料とすることがしばしばだった1993年に、これへの対抗上、設立された。十月事件の結果、この面での緊張は去ったが、十月事件によって失職したソヴェト幹部の再就職先という独特の役割を担うことになった。これは、大量失業の到来を予測して1991年に導入された雇用センターが、本来の任務よりも、失職したソ連共産党職員の新就職先としての役割を果たしたのと同様である。

*79 ロシア共産党市組織、ヴェテラン会議、アフガニスタン元兵士会議、「兵士の母」市支部、医療労働者労組などで構成。

た(当選させられた)この社長たちは、市ソヴェト内で自分たちの意見を通すことはできないのに、その決定には代議員として縛られ、しかも決定実現のために企業の資源を供給しなければならないという事態となった。また、「灯台」から当選した新人代議員も、市病院長、市警察署長などの地方名士を含み、1994年の市集会が抱えていた弱点であるところの「庶民性」は克服された*80。

市の指導者たちと一通り面談した結果として、筆者は、大衆民主主義を前提とすれば、ポポフが頭一つ抜いているのを否定できない。まず彼は、ルゴフスキフ等と違って政敵を戯画化しない。また、共産党市委員会書記としての立場と市ソヴェト議長としての立場を峻別している。この点でポポフは、州都タンボーフの共産党組織が争点を過度に政治化する傾向があることに対して非常に批判的である*81。ポポフに対抗するルゴフスキフは、政策的な創造性、雄弁術、実務面での指導力に優れており、ロシアがもし資本主義への「中国型の道」、テクノクラシー的な道を選んでいたら、おそらく第一級の指導者になったであろう人物である。しかし、ロシアはその道を歩まなかった。ルゴフスキフは、自分が支持していたエリツィンによって権力の座から追われ、民主的な選挙が行われると、どう見ても自分より劣っているスーリコフに勝てない。ルゴフスキフは、筆者との面談中においても、「民主主義は最良の体制ではない」という言葉を、まるで自分自身に言い聞かせるかのように繰り返すのだった。

タンボーフ州ウヴァーロヴォ市

ウヴァーロヴォ市は、タンボーフ州の南端、ヴォローネジ州との州境にある人口約3万5千人の都市である。1962年に化学肥料を主要生産物とする化学コンビナートが立地されたことによって急速に発展し、1966年に市に昇格した若いまちである。有名な「ラフマニノフの家」があるイワノフカ村は、この市の郊外に位置している。筆者も、長年の夢かなってイワノフカを訪問することができた。旧体制下では、ウヴァーロヴォ市は州レベルの指導者を多く輩出してきた拠点地域であった。現州知事リャーボフの地元でもある(1977-82年市党第一書記)。この市は、市を支えてきた化学コンビナートが放漫経営から崩壊したため、コトフスク市よりもさらに悲惨な状況にある。既に数年間、水、湯、暖房、電気等の供給を受けていない地区が市内のあちこちにある。市の周縁にある操業停止した巨大コンビナートが、蜃気楼のように市の景観を圧迫している。

*80 ルゴフスキフ(1997.04.16/17、コトフスク市)、ポポフ(1997.04.15、コトフスク市)からの聞き取り。

*81 大祖国戦争50周年における市議会建物上でのソ連旗掲揚などをめぐるタンボーフ市政の紛糾は、『ニューヨーク・タイムズ』等によっても報道され、世界的に有名である。

< 図 5 > ウヴァーロヴォ市における指導者の異動 1985-1996

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
市党第一書記	N. ボノマリョフ			V. カルポフ		M. ニストラートフ							
市党第二書記	F. スシュコーフ	V. ククソフ	V. セリューギン										
市ソヴェト議長、 市集会議長						M. イワノフ	ククソフ	S. カルポフ	F. スシュコーフ		V. パーニン		
市イスパルコム議長、 市行政府長官	V. ルダコフ	V. ククソフ					F. スシュコーフ		F. スシュコーフ		M. ニストラートフ		
						↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑
						民主ソヴェト選挙	ゴルバチョフの兼任	第二の兼任	郡行政府長官 任命制導入 八月クーデター	十月事件	S. カルポフ	郡長選挙	

ウヴァーロヴォ化学コンビナートの崩壊に責任を負うのは、1980年代半ばから企業長を務めたウラジーミル・ラージェフ（1943年生）である。ラージェフは、1985年、当時の市党第一書記ニコライ・ボノマリョフの主張により、いったんは解任され、別の工場に移されていた。ところが、1988年国営企業法に基づいて企業長選挙が行われると、労働集団はラージェフを選出し、化学コンビナートに呼び戻した。返り咲いて以降のラージェフは、中国とのバーター取引により、中国製消費物資を市民に放出して人気を博した。この時期、ラージェフは、サッカー・チームを保有し、この田舎町に連邦規模のスターを呼んでフェスティバルを開催し、中国風の高級ホテルを建設するなどバブル経営を行い、その反面、肥料生産の基幹である硫酸製造施設の更新を怠った。1990年代に入ると、硫酸を外部より購入して加工するようになったが、これによりコンビナートは競争力を失った。1994-95年冬季には、ラージェフは、経営悪化を理由として、コンビナートが責任を負っていた分の公共サービス（電気、暖房）を一方向的に停止したので、市の相当部分において「非常事態」が発生した。こうしたことから、ラージェフは、市民とコンビナート従業員の敬愛の対象から憎悪の対象へと急転落した。<表4>の1993年以降の欄からラージェフが突然消えているのは、このためであろう。1996年によろやく、コンビナートがモスクワ資本により買収されたことによりラージェフは解任され、(かつて掻き集めていたバウチャーを元手に自ら興した) 商社の社長となった。ラージェフの「功績を考慮して」、市の企業経営者会議は彼を有給議長に選んだ*82。

*82 インタビュー：セルゲイ・ボリソヴィチ・カルポフ（Karpov）/市ソヴェト代議員、フوند「協力（Sodeistvie）」指導者、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市；Uvarovskoe gorodskoe sobranie deputatov Tambovskoi oblasti. Reshenie ot 18.01.1995 "O chrezvychainom polozhenii s otopeniem zhilogo massiva 1-go mikroraiona"；Uvarovskaia zhizn'，1995.02.15.

＜表4＞タンボーフ州ウヴァーロヴォ市の指導者の名声

	ペレストロイカ以前 (-1985)	ペレストロイカ期 (1985-1991)	ソ連共産党の廃絶から ソヴェトの廃止まで (1991-1993)	ソヴェトの廃止以降 (1993-1996)
第1位	リャーボフ 62 (市党第一書記)	ポノマリョフ 47 (市党第一書記)	スシュコーフ 35 (市行政府長官)	スシュコーフ 40 (市行政府長官)
第2位	ルダコーフ 31 (市党第一書記)	ラージェフ 37 (化学工場長)	ラズィン 33 (化学建設指導者)	コナベリチェンコ 32 (公共サービス供給企業長)
第3位	シェスタコフ 23 (化学コンビナート長)	ラズィン 35 (化学建設指導者)	ラージェフ 30 (化学コンビナート長)	ポポフ 22 (植物油工場長)
第4位	ラズィン 21 (化学建設指導者)	ポポフ 11 (植物油工場長)	コナベリチェンコ 15 (公共サービス供給企業長)	メニシコフ 21 (市行政府長官第一代理)
第5位	ラージェフ 17 (シェスタコフ後の化学コンビナート長)	ニストラートフ 10 (市党第一書記)	ポポフ 13 (植物油工場長)	イワノフ 10 (市裁判所長)
第6位	チェルノビャートフ 10 (郡イスパルコム議長)			

ウヴァーロヴォ市は、コトフスク市と同様、市政の政党化が進んでおり、人民愛党派、「我らが家ロシア」派の双方が強い。ここでも特筆すべきは、破局的な社会経済状況にもかかわらず、少なくとも地方選挙では「我らが家ロシア」派が奮闘していることである。1996年12月の市長選挙では、人民愛党派の現職候補が有効票の52% (4,785票) とって当選したが、「我らが家ロシア」系の候補も28% (2,605票) 獲得した*83。市ソヴェト15代議員の党派構成は、ロシア共産党員5名、そのシンパ4名、「我らが家ロシア」系6名と言われている*84。ただし、コトフスク市の「我らが家ロシア」派が企業経営層に支えられているとすれば、ウヴァーロヴォ市のそれは、中級指導者や教員などに支えられており、その点で1989-91年頃の民主運動の雰囲気をごんにちに伝えていると言えよう。たとえば「我らが家ロシア」派の市指導者セルゲイ・ボリソヴィチ・カルポフ、1996年市長選挙における「我らが家ロシア」系候補のユーリー・サフォーノフともに元職・現職は教員である。

＜図5＞参照。＜表4＞が示すように、やがて州イスパルコム議長、州ソヴェト議長、州議会議長、そして州知事となるリャーボフ(1936年生)は、1982年に市の指導部を去ってから15年近く経った調査時(1996年)においてさえ神話的地位を占めている。リャーボフの後は、いずれも1950年代前半生まれの二人の若い市党第一書記が続いた*85。うち二人目の第一書記は、1990年春の時点で思わぬ不運に襲われた。45名の代議員を選んだ市ソヴェト選挙で落選したのである(つまり、この市では

*83 タンボーフ州選挙管理委員会のプロトコール。

*84 セルゲイ・カルポフからの聞き取り、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市。

*85 ニコライ・ポノマリョフとウラヂーミル・アレクセーエヴィチ・カルポフ(前出のセルゲイ・ボリソヴィチと混同なきよう)。このうちポノマリョフは、1988年には州指導部に抜擢された。やがて彼は、バーチン下で副知事となり、リャーボフの勝利後、解任されるだろう。

ゴルバチョフの兼任方針を実現する前提がなく、**A 1 型の発展は最初から除外されていた**。彼は、不幸中の幸いか、ウヴァーロヴォ郡ソヴェト議長には選ばれ、5月には市党第一書記を辞任してしまう^{*86}。この後を継いで市党第一書記になったのは、それまでペルヴォマイスキー郡党第二書記だったミハイル・ニストラートフだった^{*87}。ニストラートフがウヴァーロヴォに戻されたのは、上記のような政治状況を改善するという意図があっただろうが、実際には彼は、新しい市ソヴェトにもイスパルコムにも影響力はなかった。この市ソヴェトは、社会的には職長、教員、医師などの中級指導者とインテリから、政治的には穏健民主派から主に構成されており、修理工場長だったミハイル・イワノフを議長に選ぶと同時に、イスパルコム議長には、1987年以來この任にあったヴィクトル・ククソフを再任した。コトフスク市ソヴェトと同様、このソヴェトは最後までエリツィンに反抗しなかった^{*88}。

コトフスク市と同様、ウヴァーロヴォ市ソヴェトも1991年の第二の兼任方針を追求しなかったが、八月クーデター後、イワノフがソヴェト議長を辞任したので、イスパルコム議長ククソフが臨時措置としてソヴェト議長を兼ねた^{*89}。このままククソフが市行政府長官に任命されていれば、ウヴァーロヴォ市はA 2型の幹部異動を辿ったことになっただろうが、ここで、州レベルでの裏工作が行われた。八月クーデターまで(州西部の)ミチューリンスク市党第一書記だったフョードル・スシュコーフ(1944年生)が行政府長官に任命されたのである。スシュコーフはウヴァーロヴォ市の出身で、1980年代の中盤にはウヴァーロヴォ市党第二書記を務めていた。その後、州内のその他の郡、市の党第一書記、ソヴェト議長を歴任したが、心はいつも故郷にあった。そこで、バベンコ新知事に働きかけ、1992年1月にウヴァーロヴォ市行政府長官に任命されたのである。州都に次ぐ権威を持つミチューリンスク市の党第一書記からウヴァーロヴォ市の行政府長官に移るのは降格に近い横滑りであるから、スシュコーフにとって難しいことではなかった^{*90}。したがって、**形式的にはスシュコーフ**

*86 *Zaria kommunizma*, 1990.03.17.

*87 1949年生まれ、1971年にタンボーフ化学機械大学を卒業。1977年、化学コンビナートからウヴァーロヴォ市党委員会にリクルートされた。1982年には上級党学校を修了、州党委員会で勤務した。ウヴァーロヴォ市への帰還以降は、ソ連共産党の解体まで市党第一書記を務め、その後は建設資材会社を経営しながら「再建」ロシア共産党の市第一書記としても活動した。

*88 *Zaria kommunizma*, 1990.04.3；セルゲイ・カルポフからの聞き取り、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市。

*89 *Uvarocskaja zhizn'*, 1991.09.20.

*90 インタビュー：リュボフィ・ワシーリエヴナ・プロホレンコ (Prokholenko) /ウヴァーロヴォ市行政府総務局長、1996.12.4、ウヴァーロヴォ市；ガリーナ・ウラヂスラヴォヴナ・ナソノワ (Nasonova) /ウヴァーロヴォ市ソヴェト代議員、ソヴェト組織部長、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市。

はC型の行政府長官となるわけだが、このような異動が可能だったのは、彼が市・郡レベルのエスタブリッシュメント、しかもそのかなり上位に位置していたからである^{*91}。

市行政府長官になりそびれた後、ククソフは元職（エネルギー関連）に戻った。これに替わって、1992年3月には、前出のセルゲイ・カルポフ^{*92}が市ソヴェト議長に選ばれた。民主革命時にはっきりと民主派陣営に所属していたカルポフを議長に選ぶ過程は紆余曲折に満ちていたようである^{*93}。1993年十月事件の当然の結果として、市ソヴェト議長カルポフは失業したが、その半年後、スシュコーフにかわって、ウヴァーロヴォ市行政府長官に任命された。この唐突な人事は、州レベルの党争と緊密に結びついていた。十月事件で放逐された元州ソヴェト議長リャーボフが、復活をかけて地元のウヴァーロヴォでタンボーフ州議会選挙に立候補したのである。既に連邦評議会（上院）選挙においてリャーボフに競り負けて落選していたバベンコ州知事は、何としてもリャーボフの州議会当選を阻止しなければならなかった。まんいちリャーボフが当選すれば、彼が州議会議長に選ばれることは確実であり、その場合、バベンコの立場は十月事件以前よりもずっと悪くなってしまうからである。そして、ウヴァーロヴォ市行政府長官のスシュコーフは、かつてリャーボフと同市の党委員会で共に働いた仲であり、バベンコのために選挙運動しないことは明白であった。そこでバベンコは、1994年3月3日、スシュコーフを解任して、既に州議員に立候補していたカルポフを市行政府長官に任命した。バベンコがカルポフを任命するにあたってつけた条件は、「自分の仕事をし」（つまり、選挙を全力で戦い）、リャーボフの州議会当選を断固阻止することであった。実際カルポフは善戦して市部ではリャーボフをリードしたが、郡部で敗れ、結局、リャーボフがウヴァーロヴォ選挙区において当選

*91 名声調査によれば、スシュコーフの「権威の理由」は、1991-93年につき、「教養・文化」「プロフェッショナルリズム」がそれぞれ3点で最多であり、1993年以降については、「上位指導者との人脈」が最多（4点）となり、「プロフェッショナルリズム」が3点でそれに続く。なお、ブレジネフ時代の指導者であるリャーボフについては、「党籍、党への献身」が11点、「文化・教養」が8点、「プロフェッショナルリズム」が4点である。同じくベレストロイカ期のポノマリョフについては、「党籍、党への献身」「文化・教養」がそれぞれ4点で最多、「プロフェッショナルリズム」と「強力なイニシアチブ」がいずれも3点でこれに続く。指導者の「教養・文化水準の高さ」がしばしば言及されるのは人文州タンボーフの特徴であり、これはおそらく、指導者の実態よりも回答者の側の指導者イメージをむしろ反映しているのだろう。

*92 1956年生まれ、1979年タンボーフ教育大歴史学部卒業。教員、「知識」協会職員を経て市党委員会指導員になったが、1982年には教育分野に戻ってある学校の校長となった。皮肉なことにカルポフが後に敵対するラージェフ企業長下の化学コンビナートは、その学校の庇護組織だったそうである。個人的な事情から1989年には一教員に戻り、1990-91年にはイワノフ議長下で有給の市ソヴェト副議長を務めた。1983年以降の市ソヴェト代議員であるカルポフは、1996年に選出された市ソヴェト代議員の中でも「最長老」である（本人からの聞き取り、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市）。

*93 *Uvarovskaia zhizn'*, 1992.01.27; 1992.03.7.

した。バベンコが恐れた通り、これはバベンコ州行政府の「終わりの始まり」となった。

リャーポフが勝った以上、カルポフはバベンコにとって用済みとなった。また、カルポフは、州指導部にとって頭痛の種であった化学コンビナート問題を声高に提起し、ラージェフの解任を要求した。業を煮やしたバベンコ知事は、裁判所がスシュコーフ解任の不当性を認めたのをこれ幸いに、4月20日、カルポフを解任、当たり障りのない指導者であるスシュコーフを復職させてしまった。州議会選挙と同日に行われた市集会選挙ではスシュコーフは落選していたのであって、バベンコ知事は、「市会議員」にさえ当選できなかった人物を市長に再任命したことになる^{*94}。

このとき選ばれた市集会は、カルポフを含む7人の代議員から成った。コトフスク市集会が共産党の完全な支配下に置かれたのとは対照的に、ウヴァーロヴォ市集会には政党代表は一人も当選しなかった。おそらく、共産党市組織を指導していたニストラートの意欲または能力に問題があったのだろう。逆に、7代議員中3名は警察職員および市職員であり、スシュコーフ長官に対して弱い立場にあった。前述の通り、1995年までスシュコーフ長官がこの市集会の議長を兼ねた。1995年9月、連邦地方自治一般原則法と州地方自治法の採択を受けて、市集会は、中等学校校長で穏健民主派であったウラヂーミル・パーニン（1946年生）を議長に選んだ^{*95}。成立時の市集会には有給議員は皆無で、事務局もなかった。しかし、1996年12月に改選されるまでには、パーニンが行政府の定員を回してもらう形で半有給 (polstavka) となり、そのうえ、職員1名とはいえ事務局も形成された。

このように、1993-94年頃にははっきりと党派が分化したコトフスク市とは対照的に、ウヴァーロヴォ市政の政党化は比較的ゆっくりと進んだ。たしかに州政の動向と対応する形で、1995年には「我らが家ロシア」の市支部が組織された。しかし、その音頭をとったのはウヴァーロヴォ化学カレッジ校長で、ロシア共産党員でもあったユーリー・サフォーノフ（前出）であった。しかも、彼がこの行為により離党を迫られるようなことはなかった。さすがに選挙の年である1996年に入ると、この牧歌的な状況は若干変わった。1月には、セルゲイ・カルポフが、ジョージ・ソロスの「開かれた社会」機構から資金援助を受けて、ファンド「協力」を開設し、政治活動の拠点とした。6月にはスシュコーフ市行政府長官が病死した。サマーラ州キーネリ郡について紹介したのと同様の後継者選考手続きが踏まれ、10月によくニストラート

*94 セルゲイ・カルポフからの聞き取り、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市。

*95 Protokol zasedaniia Uvarovskogo gorodskogo sobraniia deputatov No.5, 15.09.1995: Reshenie "O vnesenii izmenenii v Polozhenie ob Uvarovskom gorodskom sobranii deputatov"; Reshenie "Ob izbranii predsedatelia Uvarovskogo gorodskogo sobraniia deputatov"; *Uvarovskaia zhizn'*, 1994.03.23

フが後継長官に任命された。ニストラートフは、旧体制末期に市党第一書記だった時代もぱっとせず、その後の企業経営者としても成功していない人物であるから、リャーボフ知事は、4ヶ月にも及ぶ逡巡を経て、結局、候補者の政治的忠誠心を人選の基準にしたと誹られてもやむを得ないだろう。ニストラートフは、ロシア共産党書記の仕事で化学コンビナート付属農場長を務めている人物に譲り、工場を自分の息子に譲って、長官に就任した^{*96}。

こうして、12月の市長選挙には5人の候補者が出馬したものの、事実上、サフォーノフと新任現職のニストラートフとが四つに組むことになった。奇妙なことに、ここに至ってもサフォーノフは「ロシア共産党員」の肩書きをつけたままであった。1948年生まれ、サフォーノフは1970年にタンボーフ教育大物理数学部を卒業、物理教師となった。1975年にはウヴァーロヴォ化学中等技術学校に招かれ、1990年には校長になり、同校の親組織である化学コンビナートの崩壊という事態を前に生き残りのための舵取りを担われることになった。同校のカレッジへの改組はその一環である^{*97}。経営問題に取り組んだことにより、教育者としての従来の視野を越える独自の見解を持つようになり、そこからロシア共産党の方針への異論も生まれた。本節冒頭で述べた市長選結果は、コトフスク市のそれと似通ったものである。いずれにおいても共産党が推す現職候補が危なげなく勝っているが、ほんらい、タンボーフのような州において現職の強みと共産党の票動員とが結合した場合、票差がもっと開いて当然である。やはり現職候補の個人的魅力に問題があるろう。他方、挑戦者サフォーノフの弱点としては、インテリ然とした (zaumno) 話しぶりのため庶民に浸透できない、本人の政治的な立場がはっきりしない、企業労働者への働きかけが弱いなどがあげられている。また、知事が任命したばかりの市長を選挙で落としてしまったら、州からの補助金が来なくなるのではないかという危惧を選挙民が抱いたとも言われる。

1996年12月、投票日直前に筆者が面談した際、サフォーノフは、自分は社会政策においては共産党の方針を支持しているが、社会政策の財政的前提になる経済政策についてはそうではないと述べた。彼によれば、共産党は「市場経済に反対しない」と言うだけではだめで、「市場経済の下で発展するのだ」と明言すべきなのだ。共産党が州の権力を掌握してから1年になるのに経済の好転は見られない。このため、かつての党の友人が党のオポジションになりつつある。たとえば、化学コンビナートは自社株の15%しか所有しておらず、株の35%は州と市の行政府の手中にある。ところが州・市行政府がこの35%を生かして投資環境を作る等の作業を行っていない。ここで筆者が、「州知事選でリャーボフに入れた有権者がニストラートフに入れ、ベーチ

*96 セルゲイ・カルポフからの聞き取り、1997.04.18、ウヴァーロヴォ市。

*97 サフォーノフの選挙ビラ。

<表5> タンボーフ州ラスカーゾヴォ市の指導者の名声

	ベレストロイカ以前 (-1985)	ベレストロイカ期 (1985-1991)	ソ連共産党の廃絶から ソヴェトの廃止まで (1991-1993)	ソヴェトの廃止以降 (1993-1996)
第1位	スヴェシュニコフ 43 (ラシャ・コンビナート長)	ペレペチン 60 (市党第一書記)	コロプコフ 47 (市行政府長官)	コロプコフ 44 (市行政府長官)
第2位	モソロフ 24 (市党第一書記)	スポーチン 24 (生物化学工場長)	スポーチン 30 (生物化学工場長)	ペレペチン 26 (「ラスカーゾヴォ投資」 副社長)
第3位	サドヴニコワ 21 (市イスパルコム議長)	スヴェシュニコフ 20 (ラシャ・コンビナート長)	ペレペチン 18 (「ラスカーゾヴォ投資」 勤務)	スポーチン 22 (「生物化学」社長、市・ 経営者会議議長)
第4位	エルモーロフ 19 (市党第一書記)	コロプコフ 20 (市イスパルコム議長)	サベルキン 16 (種畜養鶏場長)	サベルキン 18 (種畜養鶏場長)
第5位	ペレペチン 15 (市党第一書記)	サベルキン 16 (種畜養鶏場長)	バヂコワ 15 (市行政府長官代理)	フィルソフ 15 (「エルトラ」工場長)
第6位	シェルコフニコフ 12 (市党第二書記)	テベキン 13 (皮革工場-II長)	セルゲーエフ 12 (郡行政府長官)	テベキン 8 (「ラスカーゾヴォ投資」 社長)
第7位	ロヂオノフ 11 (皮革工場-I長)		テベキン 7 (「ラスカーゾヴォ投資」 社長)	セルゲーエフ 6 (郡行政府長官)

注：皮革工場-Iは、元々あった工場を、皮革工場-IIは、ユーゴスラヴィアとの合併によって1980年代に建設された新しい工場を指す。「ラスカーゾヴォ投資」は、皮革工場-IIが株式会社化されて生まれたものである。

<図6><表5>も示すように、循環モデル、すなわちペレペチン-コロプコフ体制の動揺と再確立として把握した方がよいことである。

1987年いらい市の執行権力の長を務めるユーリー・コロプコフは、1945年生まれ、教員出身である。彼は、1980年代前半に全州的に有名な女傑であったマリヤ・サドヴニコワ市イスパルコム議長の下でイスパルコムにリクルートされ、議長代理となった。サドヴニコワが州指導部に抜擢されて後、2名の短命なイスパルコム議長を経て、1987年7月にコロプコフが議長に就任した。彼は1990年春に成立したソヴェトによっても再任され、1991年には市ソヴェト議長も兼任した。そのまま順当に市行政府長官に任命され、こんにちに至っている(A2型)。4年近くにも及ぶ「民主派」州政の下で市行政府長官を務めながら、市のロシア共産党組織およびその現指導者ペレペチンとの関係は良好である。

旧体制下最後の市党第一書記であり、またこんにちロシア共産党市党第一書記であるペレペチンは、1947年生まれ、建設業の出身である*100。彼は、1987年12月、タ

*100 1970年から78年にかけて共産青年同盟タンボーフ州委員会で学生建設派遣隊の業務に従事。1978年以降は共産党タンボーフ市委員会、のち州委員会に勤務し、1982年にはロストフ・ナ・ダヌー上級党学校を修了。その後、州都のレーニン市区党第二書記、イスパルコム議長を経て、1986年にタンボーフ市イスパルコム議長代理となった(本人からの聞き取り、1997.04.21、ラスカーゾヴォ市)。なお、<表1-5>においてペレペチンの名が1985年以前の欄であげられているのは、おそらく回答者の記憶の混乱である。

ンボーフ市イスパルコム副議長という要職から、市党第一書記としてラスカーゾヴォに派遣されてきた。コロプコフの場合と同様に前任者が短期間しかもたなかった後を継いだところを見ると、ペレペチンもリリーフ的な役割を期待されたのかもしれない。

名声調査によれば、ペレペチンの「権威の理由」は、ペレストロイカ期について「イニシアチブ...」が6点で最多、「党籍、党への献身」「地元利益の擁護者」「説得力」が4点でこれに続く。1991-93年については「教養・文化」と「説得力」（それぞれ2点）が、1993年以降については「地元利益の擁護者」（4点）と「党籍、党への献身」（3点）が主な理由となる。1993年以降の「党籍」は明らかにロシア共産党籍であるが、これが「権威の理由」とされているのは興味深い。他方、コロプコフの「権威の理由」においては、一貫して「現に就いている地位ゆえに」が高位を占めている（ペレストロイカ期に2点、それ以降一貫して4点）。コロプコフの不人気を物語る調査結果である。もちろん、それ以外にも「プロフェッショナリズム」が挙げられていることも指摘しなければならないが（1985年以後の3期につき、3点、4点、5点）。

ビッグバン以前の無力な市ソヴェトの世話役は、市内のビール工場長（ボリス・イグナートフ）が務めていたが、1990年春、彼がそのままソヴェト議長に選ばれた。ペレペチンは対立候補として立つことをせず、この市では、ゴルバチョフの兼任方針が実現されなかったからといって、「党の敗北」とは別にみなされなかった^{*101}。なお、コロプコフが市行政政府長官に任命された後のソヴェト議長（タチヤナ・ペロワ）は、十月事件後、長官代理職のオファーを断って、本来の職業資格に従って市行政政府教育部に移った^{*102}。

この市でもロシア共産党組織は1993年に再建されたが、暫くの間、市政には影響力を持たなかった。概してこの市では、コトフスクやウヴァーロヴォと比べて、ソ連共産党の元指導者のうち左翼に留まった部分が生活基盤を得るのに苦労したようである（こんにちでこそペレペチンは「ラスカーゾヴォ投資」の副社長、かつての市党第二書記、1996年市長選の人民愛党派候補であるアレクセイ・シェルコフニコフは「生物化学」社の主任機械技師であるが）。これが、市の立法機関、1993年までのソヴェトと1994年以降の市集会の運営が無党派層に任され^{*103}、結果として行政府独裁的な憲章体制が成立した背景にあると考えられる。もちろんその前提としては、コロプコフが共産党にとって許容範囲内の市長だったことがあげられるが、ソ連共産党消滅後

*101 インタビュー：ボリス・ミハイロヴィチ・シャーロフ（Sharov）/ラスカーゾヴォ市行政政府長官代理＝資産管理担当、1996.12.10、ラスカーゾヴォ市。

*102 インタビュー：リヂャ・フィリポヴナ・ヴォロジエンキナ（Vorozhenkina）/元ソ連共産党ラスカーゾヴォ市委員会第三書記、1996.06.24、ラスカーゾヴォ市。

*103 市集会の11名の代議員のうち4名は共産党員であった（ペレペチンからの聞き取り、1997.04.21、ラスカーゾヴォ市）が、指導的な役割を果たさなかった。

のペレペチンは、建設技術者としての本来の資格を生かして皮革工場-IIの資材調達技師となり、工場私有化後は副社長となった。ところが、1986年以來この企業の長であったユーリー・テベキン（<表5>参照）が、配偶者の死による個人的な危機に見舞われたことから、ペレペチンに大きな責任が降りかかることになった*104。こうした事態を克服して経営をそれなりに安定化させたペレペチンは、1996年末によく市党第一書記に選ばれ、本格的な政界復帰を果たしたのである。

連邦地方自治一般原則法の採択後、市集会は、「生物化学」社長であったコンスタンチン・スポーチンを議長に選んだが、社長業と議長職を兼任する彼には、コトフスクのポポフ、ウヴァーロヴォのパーニンのような市政発展への情熱は期待すべくもなかった。既述の通り、コトフスク市においては、行政府長官と市集会議長との兼任が拒否され、連邦地方自治一般原則法採択後は議長が有給とされ、1996年の改選までに職員10人のソヴェト事務局が形成された。ウヴァーロヴォ市においては、連邦地方自治一般原則法の採択後に選出された議長は半有給となり、職員数1名とはいえソヴェト事務局が形成された。ところがラスカーゾヴォ市においては、1996年選挙に至るまで議長は無給、事務局も形成されず、しかも名称が「ソヴェト」に復帰することさえなかったのである。ラスカーゾヴォ市集会は頻りに招集されたし、その議題も市民生活の多面に及んだ（言い換えれば、他州の自治体にまみ見られたように、半年に1回集まって大統領布告が許した四つの問題だけを審議するなどということは、このラスカーゾヴォ市においてさえ考えられないことだったのである）。それでもなお、有給議員と事務局を持たないことは、ラスカーゾヴォ市集会の活動能力を低めた*105。

こうして、「我が家ロシア」派は存在せず、共産党は市に照準を絞った政策を持たず、市議会は弱体という制度的真空の中で市行政府のみが機能しているような状況の中で、ラスカーゾヴォ市は1996年の地方選挙を迎えたのである。市の人民愛国派はペレペチンを市長候補に擁立しようとしたが、彼はこれを拒否した。ペレペチンがとった選択は、共産党指導者が市長になるウヴァーロヴォ型の道でも、ソヴェト議長になるコトフスク型の道でもなかった。彼は党務に専念し、議会多数派を占める（ことが確実だった）共産党代議員を通じてコロプコフ行政府を統制する方法を選んだのである。自分が市長になっても、ソヴェト議長になってもラスカーゾヴォ市の経済状況は変えられない、それは連邦レベルの政策を変えない限り無理である、現状について連邦権力と責任を分かち合いたくない、というのがペレペチンの基本姿勢である。この姿勢に照らせば、こんにちの連邦権力の下で州権力を敢えて奪取した共産党タン

*104 ヴォロジェンキナからの聞き取り、1996.06.24、ラスカーゾヴォ市。

*105 前出のシャーロフ、およびコンスタンチン・アレクサンドロヴィチ・スポーチン（Subbotin）/ラスカーゾヴォ市集会議長からの聞き取り、1996.12.10、ラスカーゾヴォ市。

ボーフ州組織の選択は誤りだったということになりますね、と筆者がペレペチンに問うたところ、「確かに(知事になったからといって)リャーボフが得るところ少なかった(vyigral malo)」との答えだった^{*106}。筆者の観察では、州政はベーチンに任せ、共産党は最大野党にとどまっていた方が良かったと暗示しているようだった。

市の共産党組織は、一応、市長候補として旧体制下で市党第二書記だったシェルコフニコフを立てたが、その構えは、「我々が勝てばよし、しかし負けても別に悪夢ではない」といった程度のものであった。実際、党規律を乱して共産党からもう一人婦人候補(市ラジオ放送局の編集者)が立ち、有効票の13%(1,510票)とって著しく票を割ったが、これに対する党機関からの譴責はとりたててなかったようである。選挙結果は、コロプコフが有効票の36%(4,230票)を獲得して当選、シェルコフニコフは25%(2,935票)得票した^{*107}。市議会選挙は、30名の代議員定数に対して40名弱の立候補者という停滞したものであり、当選者30名中の23名は共産党員という結果に終わった。ソヴェト議長候補としては、「共産党代議員グループ」は、「党の商標を傷つけないために」慎重に人選し、旧体制下でラシャ・コンビナートの有給党書記だった婦人を推し、選出させた^{*108}。この体制下でのペレペチンとコロプコフの関係は、ゴルバチョフの兼任方針以前の党第一書記とイスパルコム議長の関係に限りなく近いものとなってゆくように思われる。

タンボーフ州の3事例は、この州でカシキスモが発達できないのは、共産党が強すぎるからではなくて、逆に、この州においては「我々が家ロシア」派が、案外、地方レベルに根を張っており、そのため地方政治が、カシキスモが育たないほどに競争的になるからであるということを示した。そのうえ、地方選挙が党派的であればあるほど旧体制エリートの生き残りの程度は小さく、執行権力に対しての地方議会の統制力も大きい、そして逆もまた真なりという傾向が示された。「熾烈な党派政治、ニューリーダー、強い議会」の典型はコトフスク市であり、逆の例はラスカーゾヴォ市、その中間にあるのはウヴァーロヴォ市である。

III. まとめ

なぜ、カシキスモはサマーラ州でのみ発展したのか。なぜ、タンボーフ州は、この脱共産主義期ロシア政治の大道から外れてしまったのか。

両州に共通するのは、地方エリートの年齢構成である。ロシアの地方政治は1945-

*106 ペレペチンからの聞き取り、1997.04.21、ラスカーゾヴォ市。ただし、リャーボフ自身は無党派である。

*107 州選挙管理委員会のプロトコール。

*108 ペレペチンからの聞き取り、1997.04.21、ラスカーゾヴォ市。

55年生まれの世代に支配されているということを両州共に示した。本稿における稀な例外は、より年輩な世代からクラスノアルメイスキー郡のブドーリン（1940年生）、コトフスク市のポポフ（1942年生）、ペストラフカ郡のダヴィドキン（1936年生、ただし彼は表向きは政界を引退している）とビジャーノフ（1943年生）、ウヴァーロヴォ市のスシュコーフ（1944年生）、他方、より若い世代からウヴァーロヴォ市のカルポフ（1956年生）、ペストラフカ郡のリュバーエフ（1957年生）が稀な例外、しかも年齢上あまり著しくない例外をなすのみである。ペストラフカのリュバーエフは本稿中唯一の1955年以降に生まれた首長であったし、クラスノアルメイスキーのズャトチン（1950年生）は、相対的に若い挑戦者であった。本稿中のその他の市・郡では、「強い指導者」若返りの兆しさえ見られなかった。

この、1945-55年生まれの世代の優位は、おそらく、1935年から45年にかけてのソ連が蒙った苦難の帰結であろう。周知の通り、この苦難は、出生率を大幅に低下させ、しかもその時期に生まれた世代の健康状態に禍根を残したのである。実際、1930-45年生まれの世代は概して健康に恵まれなかったこともあり、パレストロイカ初期の人事異動の波に飲まれるような形で比較的若くして指導職を去っている（本稿中の例は、シチェルビーニン、フォーミン、クワソフ）。このことは、ソ連の市・郡における指導者のラジカルな若返りをもたらしたのである^{*109}。しかも、本稿のヒーローであるところの1945-55年生まれの世代の地方政治支配は、今後もかなりの長期にわたって続くだろう。というのは、年輩の指導者に引退を強い、若年指導者の早期育成を計っていたノメンクラトゥーラ・システムが崩壊し、しかも近年のロシアの経済状況は、有能な若者に官界・政界よりもビジネスに進むことをやむなくさせているからである。

我々が旧体制からの地方エリートの連続性に目を向けるとき、サマーラ州とタンボーフ州の間の相違が明らかになり始める。本稿の事例分析は、序論で提示された、リージョン規模の数量分析の結果示された両州間の違い、つまり「サマーラ州ではその連続性は極端に高く、タンボーフ州ではやや高い」ということを確認した^{*110}。サ

*109 こうした点では、現在のロシアの地方指導者はフルシチョフ・コスイギン世代の指導者に似ている。フルシチョフ・コスイギン世代が1930年代後半の大テロの結果空いた上司の席を埋める形で急速に出世し、その後かなり長いあいだ権力の座にあったのと同様、現在のロシア地方指導者も、1980年代の中葉、30歳代の後半にして地域のトップ・リーダーとなり、すでに10年以上その座にあるのである。フルシチョフ・コスイギン世代が工業化、世界大戦、戦後復興という激動を経験したのと同様、こんにちの指導者世代も社会主義から資本主義へという人類未踏のトランジションを指導したのである。

*110 ただし、ウヴァーロヴォ市の事例は、序章で示したリージョン規模の数量分析結果を注意深く再検討する必要をも示した。というのは、C型の幹部異動は必ずしもニューリーダーの台頭を意味するものではなく、一握りの寡頭政指導者間での官職たらい回しの結果であるかもしれないということが明らかになったからである。

マーラ州3事例のうち2事例(キーネリとクラスノアルメイスキー)は、A1型の幹部異動を経験した。このうちキーネリ郡で1996年にゼジンがゴレンコフスキーに替わったことは、事情を変えるものではない。というのも、ゼジンは旧体制下の郡で序列第3位の指導者だったからである(もちろん、このことは、ゴレンコフスキーよりもゼジンの方が中道的な指導者であるという政治傾向の違いを否定するものではないが)。クラスノアルメイスキー郡におけるズャトチンは明らかにニューリーダーであったが、彼の挑戦は郡「行政府党」によって打ち破られた。サマーラ州3事例において唯一A1型に属さないのはペストラフカ郡における指導者若返り(C型)であるが、これとてダヴィドキンからリュバーエフへの権力禪譲によってのみ可能になったのである。タンボーフ州の3事例のうち、旧エリートの生き残りの度合いはラスカーゾヴォ市(A2型)で最も高く、ウヴァーロヴォ市(C型)がこれに続く。旧党エリートが著しく排除されたのは、「過度期」論的な視点からは奇妙かもしれないが、「最も赤い都市」コトフスクであった。ポポフですら、旧体制下で工場党書記にしかすぎなかった。たしかに、スーリコフ市長は1987年以来、執行機関の枢要な地位を占めてきた。しかしこの市の特徴は、彼が真の権力を掌握したことはなく、こんにちも掌握していないところにあるのである。

本稿6事例中の3事例(サマーラ州の1郡、タンボーフ州の2市)においては、1996年市長選挙において現職が有意な挑戦を受けた。しかしここで重要なのは、この数の違いではなく、挑戦を受けた現職がいかにそれに応じたか、なのである。つまり、非公式の行政的資源に依拠してか、公式の政党政治上の手段によってかが重要なのである。本稿における詳細な事例分析は、サマーラ州のボス政治とタンボーフ州の党派政治との違いを明らかにしただろう。たしかに、ラスカーゾヴォ市エリートの旧体制からの連続性は大きい。しかし、この連続性は、強力なボスを生む方向では作用していない。ペレペチンは行政機構の中にみずからの政治資源を求めない。ウヴァーロヴォ市指導者にはカシキスモへの志向がある。しかし、スシュコーフもニストラートフも、サマーラ州に見た諸指導者とは比べものにならない、弱いカシケにすぎない。

本稿は、実務的なサマーラ州と理想主義的なタンボーフ州という、両州の政治文化の違いをも明らかにした。そしてカシキスモは、実務的なサマーラ州でのみ十全に開花することができるのである。これは単に、万年与党主義(政治的な首尾一貫性を犠牲にしてでも権力を獲得し、維持しようとするエリートの志向)がカシキスモの成立要件であるという一般的な事情によるものではなく、脱共産主義カシキスモの特殊性をも物語っている。第一に、それは、選挙民が旧党エリートの「転向」に対して寛容であることを不可欠の条件としている。サマーラ州の選挙民は、当該指導者が優れた行政手腕を持ってさえすれば、その政治的な首尾一貫性はどうでもいいと考える。これに対して、タンボーフ州民にとっては、当該指導者が「転向者」であるかどうか

が非常に気になる選挙「争点」なのである。第二に、実務的なサマーラ州選挙民は、リージョン選挙・地方選挙は、(ほんらい体制選択的・イデオロギー的な)連邦レベルの選挙とは別物だと考える傾向がある。したがって、1996年大統領選挙においてエリツィンのために票を動員することに失敗した首長(ブドーリンやリュバーエフ)でさえ、そのわずか数ヶ月後に行われた首長選挙(つまり自分が試される選挙)においては、ズグーノフ支持者を切り崩すことに難なく成功するのである。イデオロギッシュなタンボーフ州民はこの点でも対照的で、地方選挙・リージョン選挙は連邦レベルでの党争と別物であるとは彼らは考えない(特にコトフスク、ウヴァーロヴォの例を見よ)。こうして、サマーラ州の地方エリートは、州の選挙民の連邦選挙における投票行動がラジカルである(親共産党的である)にもかかわらず、みずからの地位を固めることができる。対照的に、タンボーフ州の地方指導者は、当該指導者が右か左かを問わず、連邦レベルの政治情勢によってみずからの運命も左右されやすい弱い立場にあるのである。

本稿における市長・郡長の任命・更迭政策と自治憲章立案過程の分析が典型的に示したように、両州の行政府のサブリージョン・エリートに対する態度は著しく異なった。「共存共栄」「庇護し統制せよ」という、旧体制下のリージョン・サブリージョン権力関係を律していた麗しき伝統を継承したのは、サマーラ州知事チトフであった。これは、タンボーフ州知事が(民主派バベンコ、人民愛国派リャーボフを問わず)サブリージョン政治に対して散発的に行った不器用な干渉の諸例とは好対照である。これはカシキスモの成否を左右するファクターである。というのも、カシキスモ成立の前提条件は、「全国レベルの[ここではリージョンレベルの-筆者]エリートが、このタイプの政治体制にとって好適な制度環境を保障すること」*111だからである。両州行政府のサブリージョン・エリートへの態度の違いは、翻って、いわゆる「知事の強さ」を解明する手がかりをも我々に与えるものである。脱共産主義期のロシアにおける「強い知事」とは、地方ボスを伸長させ、しかもみずからに従わせることができるような知事を指すのである。ここでもまた、サマーラ州がモデルケースである。みずからの権力を自治憲章に法規化した執行権力カシケが形成する位階制は、1991年以来営々と建設されてきたチトフ政治体制の完成形態と考えることができる。もちろん、クラスノアルメイスキー郡のズャトチンの挑戦は、非民主的な自治憲章がこの州においてさえ躓きの石となりかねないことを示している。しかし、ズャトチンの挑戦は、村レベルの指導者が郡レベルの指導者に直接上昇することを可能にする、この郡の特殊な政治構造のおかげで可能になったようにも思われる(農村的民主主義とでも呼ぶべきか)。タンボーフ州行政府が地方レベルでの自治憲章検討過程を統制しなかった

*111 Brie の前掲論文 ("The Political Regime..."), 64 頁。

ため、この州で採択された自治憲章は、当該自治体のエリート間の具体的な力関係をほぼ比例的に反映するものとなった。しかしながら全体としては、タンボーフ州の地方議会は、サマーラのそれと比べると、執行権力に対して大きな統制力を持っている。このことも、カシキスモの発達を阻む方向で作用する。

こうして、我々は、サマーラ州とタンボーフ州の比較分析を通じて、脱共産主義カシキスモの成立要件を明らかにすることができた。脱共産主義カシキスモは、①1990年以前の地方エリートの生存率が高く、②政治文化が実務的で、理念や政綱ではなく具体的利益や指導者への個人的信頼が地方選挙の主な争点となり、そして③地方ボスが地位を固めることをリージョン行政府が援助するようなリージョンで発達するのである。

ロシアのサブリージョナル・ポリティクスは、既存の情報媒体に頼ることができず、調査が肉体的苦痛をまますらうような研究対象であるから、後込みする人も多いだろう。しかし、政治が生身の人間の営みであるとすれば、これほど人間臭く、興味深い対象は稀であることだけは確かである。